

円盤と宇宙哲学の研究誌

—日本GAP—

ニューズレター

No. 33

日本GAPニューズレター

—1966—

第33号目次

現実的な評価をすること	アリス・K・ウェルズ	1
人間の内奥の研究所	アドリエヌ・ムンケバーグ	2
集会を続けよう	ロウランド・クセラ	3
円盤と人体保護装置	ジム・エンツミンガー	4
円盤の推進原理と米空軍発表の虚偽性	C・A・ハニー	7
ケァリフォルニアのコンタクト事件	ヘンク・ヒンフェラー	10
アダムスキーが帰ってきた? という 奇妙な物語	J・L・オトリー	13
進歩には時間がかかる	ハリー・ペレイラ	16
健康について —アダムス キー氏の所説にたいする解説	巽 直道	18
1897年の不思議な飛行船	ジェローム・クラーク	21
特別総会開催さる		34
編集後記		36

現実的な評価をすること

アリス・K・ウェルズ

今日多くのUFO研究グループは知的な人々の心中に存在する混乱にたいして大きく寄与しているというのが私の確信です。これは或る種の刊行物(複数)に悪意をもって掲載される、惑星人から与えられたと称する偽りの情報によってひき起こされます。つまり宇宙の秩序ある働きと相互関係を有していない精神の持ち主たちからのみ来る怪しい非現実的な報告によって起こされるのです。

自然の法則がどのようにして働くかについて詳細に調べてみましょう。万物には一つの正確なパターンがあります。これは太陽系中の地球、火星、金星、土星その他の惑星上のあらゆる生命にも等しくあてはまります。この太陽系は宇宙の無限の島々のあいだに存在する一つの島です。

人間が入手したいろいろの道具類に従って起こす人間の意見に基づいて、結果(現象)だけにたよって働くことよって、多くの分裂や誤った概念が事実として認められてきました。このせまい概念は永遠の生命の实在と目的にたいする障害物です。

個人としての私たちは、この地球という惑星で日常直面する諸状態を理解し、味わい、それと共に働くために必要なすべての物を持っていきますし、知識を得ることができます。一つのきわめて重要な要素があります。すなわち起こってくる物事を理解するために現実的な評価という均整のとれた状態にとどまらねばならないということです。

地球は過去に多くの変動の周期を経ています。現在はその一つの変動期にあります。真実というカードがテーブル上に置かれています。各個人は常識という実体か、それとも過去を通じて人間を無知のなかに置いた神秘主義のいずれかを選ばねばなりません。

私たちは人間の知識と理解とを共有することはできませんが、全創造物の目的と合一性に関する概念のすべてを他人に伝えることはできません。

自分が住んでいる惑星にたいして不満を感じるとき、この惑星が父の家の中の一つの部屋であって、他の部屋のいずれとも同様に重要なものだということに気づくのは一つの利点であるかもしれません。私たちは特殊な目的のためにこの地球上にいます。それでこの目的を遂行するか、それとも衰退した無能な人間の一人となるか、いずれかです。

人間の内奥の研究所

アドリエンヌ・ムンケバーグ

人間によってなされた偉大な発見のすべては人間のしつこさと進取の気象によるものでした。こうした要素より以上に各発見は真の啓示でもありました。しかし人類の進歩はよりよき物、自然界の全域に深く影響を与える物などにたいする、不満足心からなる探究心のためでもあります。このような発見こそ人間の細胞すなわち真の構成物の生命であり、その内部にはわれわれの概念をはるかに超えた絶え間なき活動が行なわれています。

科学者によれば、細胞こそ生命の組織そのもので、またあらゆる生きものの基本的な構成単位です。その内部には生命の存続に必要なあらゆる作用を自然が封じ込めています。それは一定の法則に従って整えられた有機体を形成しており、この法則の管理機能は人体や他の生命体中の細胞すべての活動を指示するのと同じ「宇宙の英知」によりかかっています。生ける細胞のように精妙に組織化された物が、一体どのようにして存在することができたのでしょうか？ 科学はただその手順の基本的な段階を推測し得るにすぎません。ここでは明瞭化と外見上の矛盾のために、科学的方法と哲学の帰納・演えき法とを関係づけるように努めようと思えます。このようにしてわれわれ自身と宇宙的分身とのあいだの間断なき意識の流通を保つのです。

細胞の魂の意識の中には、或る種の識別力をもって細胞を分化させた驚くべき選択力がひそんでいます。それは、人間に重要な特性を与えている一定の力に従った、数学的正確さで分化された仕事を行なう労働者の中心地です。このような一連の相互作用は分子単位間に化学的性質を帯びた或る種のメッセージの存在が起るにちがいないことを示しています。この分子単位のいくらかは人体の血液中进行します。雲から海洋へ移動してその中に没入してしまふ水滴と同様に、血液という海洋も人体という有機体の中の無数の微小な細胞を完全な調和を保って統合しています。他の分子単位は衛生代理店として働いたり、病気の治療や消化過程において働いたりします。また脳の分子単位は建設的創造的活動の単位になります。ゆえに肉体は真の研究所であることがわかりますし、人間は他に求める必要のないように自分の内部にすべてを持っていくことがわかります。ですからわれわれがそれを認めようが認めまいが、人間はきわめて忙しいのです。というのは人間の想像を絶した多くの物事がわれわれ個人の組織体内で行なわれているからです。人間の生活活動全体は、自分がまだ見たことのない他人に影響を与える交錯した力（複数）の複雑な組織網を形成していて、ゆえに多少とも他人の活動の多くに責任があるという事実にわれわれは気づくようになってきています。こんなわけですから人間の兄弟愛の原理は平凡なものではなく、有機的な事実となるのです。それは戦争することや兄弟の血を流すことの無益さをはっきりとわからせます。

そのような基礎のなかに植えつけられたならば、真の理解力が生長し、交友関係についての内奥の感覚に気づいてあなたは驚く

でしょう。われわれは日没のリズム、雷鳴の音楽、自然の子宮から出てくる豊富な生命体の美などに意識的に感えます。われわれは自然を研究することによって自分自身をより多く知るでしょう。人間は自然界におけるあらゆる創造的な力の縮図であるからです。人間の知覚力の深さは未測量の海のようなもので、まだ浅い水中に在るにすぎません。しかしいつかは海の長い睡眠から目覚めて、現在の諸状態にたいする真の解答を求めようになるかもしれない。そして比較することによって、合理的に調査された諸結果（現象）はその原因を導き出すということをも人間は発見するでしょう。われわれ人間の存在の目的は自衛的なもので、その法則を学ぶためには品性、目的、謙虚さなどの適応を必要とします。単に好奇心の強い探究者によって示される目的とは異なるのです。良心というサーチライトが、詳細にその是認をたしかめるべく人間の行なう物事の動機の方へ向けられています。その動機は、進化の波の一般的な前進につれて未来の諸結果が持つかもしれない効果を考慮に入れます。われわれが行使する意識的な知覚力は人体に化学的な結果として現われ、想念を、脈打つ生ける有機的な生長物にします。

われわれが海洋や宇宙を見つめるとき、空中に白雲が美しく浮かんでいます。すると植物が日光中にその葉をまき散らすように、少量の宇宙の思いやりが、超越的な信念のエネルギーの無言の知識をもたらします。そして想念は「アダムスキーの『宇宙哲学』」中の或る一節へ直観的に飛び移ります。「意識はそれ自体の運動を指示することはできないのだろうか。なすべき力と指示する英知をそなえたこの大きな宇宙力は、あらゆる意識的な瞬間を利用し

ようとすると人々にすべての物を最も寛大に与える与え手である。しかしそれは、その贈り物やアイデアに注意を払わぬ人々の手の中にあっては無情な死刑執行人となる」

哲学の一世界がこの短い文章に包含されています。しかもそれはわれわれを論理的な推理の過程へ導きます。人生は夏の夜のホルタルの光ほどの長さもないといわれていますが、それほど短い期間においてもそれは同胞の心中にときとして「不滅」を保証する印象を与えることが可能なのです。

集会を続けよう

ロウランド・クセラ

ブラザーズは次のように言っています。「他を非難することのできる者は存在しない。なぜなら万物は創造主の召使いにすぎないからだ。知られるはずのすべてを知っている人はいない。……しかし万物は喜んで奉仕することによって、知恵を噴出する源泉の理解が生長してくる。万物の現われは大庭園の美しい花のようなもので、そこでは多くの色や多種類の花々が調和してさいている。各花は他の花の現われによって自分を感じる。……一日かまたは一世紀を通じて、内部に眠っている美を観察することによってデザインは次第に現象化してくる。……各個体は他に奉仕することによって自らを栄光化する。かわって他から奉仕を受けるのである。かくして或るものは王座の足元で

奉仕し、或るものは王座の上や周囲で奉仕する。各個体は他のすべてと融合しており、奉仕の特権が与えられているがゆえにただ喜びを現わすだけである」

私が働いているエレクトロニックスの会社では二万二千の従業員が働いていますが、このうち二十パーセントはエンジニアで、近いうち更に四千名のエンジニアを雇うことになっています。ゆえに私がその新入りたちが持っているかもしれない「関心」にハッパをかけることが更に可能になるかもしれません。私はアダムスキーについて彼らに伝えたいと思いますが、彼らの本来の素質は制限されていて、ただちにどのような反応を示すかはわかりません。しかし重要なのは、彼らが短期間にどれだけ学び得るかはなく、はたして興味を持つようになるかどうかです。結局は彼らも宇宙哲学を吸収するようになるでしょう。しかし早まって彼らに純粹な哲学を伝えるならば、彼らの感情を害して互いの仲を裂くことになり、人類啓発のために援助してくれるかもしれない未来の協力者を失うでしょう。

オレンジ及びロサンジェルズ各郡の大会社等が起こっている一般の関心を基盤とし、アダムスキーの哲学の高度な学園としてヴィスタのアダムスキー財団という正当な場所を土台として、私は次のようなインスピレーションを受けました。「アダムスキー財団における毎日曜日の集会は、『宇宙哲学』と『生命の科学』だけを研究対象とする。そうすればもっと多くの参加者があり、各人の能力すべてを十分に利用できるだろう」

九月より私は定期的に毎月第一日曜日の夕方八時よりアダムスキー撮影の円盤実写フィルムの特典と一般総会を開くつもりです。

最初の会合は私の家で行なわれます。その後の集会は後日お知らせします。

こんなふうな集会をやっていたら、そのなかには種々の階層の人々が含まれますので、これは奉仕をしているわれわれにとって重要さを意味することになるでしょう。多くの残留物を含む原油を精製する場合、こうした残留物は各自相応の品にされて立派に役立ちます。原油の量が大きければあるほど分離される残留物も大になります。同様に、研究者や協力者のいずれも自分自身の周波数や周囲の人々の周波数に応じて自分の分野を確立するようになります。われわれのだれもアダムスキーが達成した偉大な使命のマネはおいそれとできません。ゆえに、各人は自分の前に展開している「自分の」使命を追求しなければならぬと思います。

円盤と人体保護装置

ジム・エンツミンガー

フリークエンシーという言葉の意味としては「それは一定時間単位における調和ある運動、または振動、または周期」と言えるでしょう。時代がすすむにつれてこの地球上のますます多くの人が生活に影響を及ぼす多くのフリークエンシーに気づいていきます。科学者によれば人体のあらゆる運動、自身が感じる物事、触覚、臭覚、聴覚等は電気的な衝動によって脳に記録されます。赤ん坊が生まれて最初の息をするとき、心臓の働きは通常の鼓動

と考えられる、きわめて急速な鼓動に変わります。これは幼児の体中の「ささいな事から活動を始める或るメカニズム」によって起こされます。

飛行機で旅する人のなかには東部から西部へ、またはその逆を飛んだ後に疲労感やときには体力消耗感を起こすことがあり、たとえ数千マイルの旅がわずか三、四時間しか要しなかった場合でもそうなることがあります。旅客機のパイロットたちは長年にわたってこの異常な疲労感を訴えてきました。これは人間に覚醒時や就寝時を告げる、人体の内部にあるタイミング・メカニズムすなわち「物質交替時計」または「生物学的時計」ともいふべきものの干渉によるものであることを科学者は発見しています。

この干渉は人間が地球の自転に沿ってかまたは反して進行する場合にわかります。南北のいずれかへ進行するときはよくわかりません。この肉体的干渉ははっきりともの考える力を失わせます。またこの変化は出発してから数時間内に起こることに注意すべきです。ただし旅行者が少し早目か遅目に眠ったりする場合と混同してはいけません。

一九五四年四月二十三日にジョージ・アダムスキーは金星の母船に乗り込んで月への最初の旅行に出発しました。このときブラザーズは、月の薄い大気に肉体を適応させるのに必要な調整時間がないために、そのときは着陸できないとア氏に説明しました。これを読んで「肉体の構造を変えるような処置をとって人体を変形させねばならないのか」といぶかる人もありましたが、事実はそのうちありません。これは肉体に磁気作用を及ぼして呼吸器官に影響を与えるような処置なのであって、こうして生物の呼吸量

を少し変える或る化学的变化を起こします。このとき肉体に幾分苦痛が生じるのです。一定の期間がすぎると肉体は序々に変化し始め、苦痛はなくなってきました。

これをアダムスキーは次のように説明しています。「低い平地から高い所へ登ると、完全な正常さを感じるようになるには数週間の調整期間を必要とすることがある。本人は心身中の変化によく気づいている」

われわれは宇宙飛行士が地球の周囲の軌道を飛ぶ際に体内に発する種々の肉体的変化について部分的に知らされています。たとえば異常な体重の減少とか、呼吸の際に感ずる奇妙なニオイなどです。真相を知らない人にはこれは奇妙なこと、理解が困難であるかもしれません。こんな異常な現象がなぜ宇宙空間で発生して、装置の完備した地上の実験所で発生しないのでしょうか？ 宇宙を旅行するブラザーズにはこのような変化は起こりませんし、あなたが彼らの宇宙船に乗ってもそんなことはないでしょう。彼らの宇宙船は惑星の活動の原理に基づいて作られているとはいうものの、それはうんと安定しています。地球上では磁力線は常に変化していて、その影響力は諸状態を理解するのを困難ならしめています。宇宙のブラザーズはこの磁力線を利用してしているのであって、それを船体の内部と外部に平等に分配しています。このために電磁場を生じ、船体自体の「大気圏」を船体の周囲に持続せしめています。ゆえに乗員の肉体に影響を及ぼすことはありません。

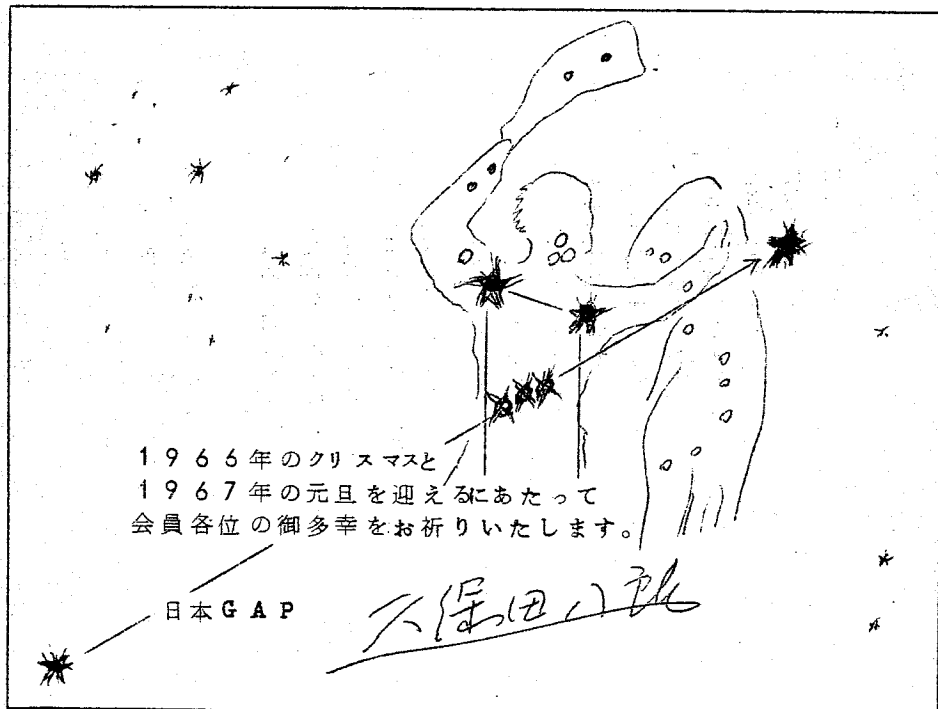
地球の科学が長足の進歩をとげたとはいうものの、将来宇宙旅行に必要な知識はまだはるかに浅薄です。

右の大気圏外飛行中に宇宙飛行士が体験した不快なガスの悪臭は、呼吸装置に入れてあった浄化流動体の残りが洩れて起こったものです。この装置が地上でテストされたときは結果は良好で、ニオイなどはありませんでした。しかし大気圏外では円盤のようなフォースフィールドによる保護がないために、ガスが洩れたのであって、これは磁力線や宇宙線などの攻撃によるものです。

人々のなかには宇宙空間で起こる各種の病気その他で宇宙飛行士の人命を失う危険が大であると思う人もありますが、これにたいしては「ノウ」と申しましょう。ポイントは次のとおりです。われわれが万物にたいする知覚力が増進すればするほど自分自身を理解するようになるからです。人間というものは自分自身を理解するならば簡単に迷うことはありません。

ブラザーズが行なっている仕事にたいしてもっと受容的になるうではありませんか。そうすればいつかは彼らの援助によって地人も保護装置内蔵の宇宙船を「ブラザーズが宇宙船の船体の周囲にフォースフィールドを帯びて保護装置を内蔵しているような宇宙船を建造することができるようになるでしょう。

この地球もわれわれが大気圏と呼ぶフォースフィールドを持っています。これは地球が空間を急速に運動することによって生じたものです。



1966年のクリスマスと
1967年の元旦を迎えるにあたって
会員各位の御多幸をお祈りいたします。

日本GAP

不保田ハジメ

円盤の推進原理と

米空軍発表の虚偽性

C・A・ハニー

各自の専攻の分野であらゆる種類の学位称号を持つ大科学者、大権威者といえども、自分の専門の学問以外の事になると日常の路上を歩いている一般人ほどの知識もないと述べましたが、これは事実であるばかりでなく、まだひかえ目な言い方です。

私の職場においては（注||ハニー氏は或る大会社に勤務している）いろいろな教育を受けた数百の人々が周囲にいますが、概してだれもが各種の問題について天下の権威者としてとうとうと弁じたてます。もっとも例外はありますが。彼らがしゃべりまくるのを聞いていますと、もし彼らの意見が政府にとりあげられるならば世界中の政治問題はすべて解決するかのような印象を受けます。

人間は自分の専門分野ですぐれていても、何かの問題に関して無学か無知であるならば、本人は口を閉じてよく知っている人の話を聞かねばなりません。あなたの家の水道管が破裂した場合、電気屋を呼びますか。電線がショートした場合に鉛管工を呼びますか。もちろんそんなことはしません。とすると円盤や惑星人に關してなぜ天文学者や物理学者に尋ねるのですか？ 彼らはこと円盤については無知以外のなにもありません。これは彼ら

の知能や専門分野の知識とは関係ないことで、円盤・惑星人問題ということになればまだ知らないというだけのことです。もちろん例外もありますが、知っている学者でも一体に口外することを恐れます。UFOの実在に關して或る学者たちが無知なるがゆえにとなえる二、三の異論があります。それらは事実合っていないために全然妥当ではありません。事実合っていないのは、異論をとなえる科学者が実際に知られている円盤問題について全く無知であるからです。ここにネヴァダ大学のフライシュマン・プラネタリアム台長O・リチャード・ノートンが最近公表した異論があります。一九六六年六月十九日付の『シカゴ・トリビューン』紙からそれを引用しましょう。

「これらの物体（UFO）のせいだとされるさまざまな特徴は人間が長い時代にわたって理解しようとしてきた事柄や科学の基礎を形成する物理の法則を汚すものである。科学者にたいして何度も自らを証明し、自然現象を予測する科学者の能力にこたえてきて、しかも現在の技術を発達させてきた物理学の諸法則を科学者は容易に無視するわけにはゆかない。このUFO問題の妥当性について科学者が懐疑的であるのはもっともなことである。

いろいろな時代を通じて地球の大気圏内を時速一萬マイルまたはそれ以上で飛んだといわれる物体は、多くの顕著な特徴を示さねばならない。こんな超スピードでは、その物体が組み立てられている材料は燃えてついには気化するだろう」

まず述べねばならないのは、UFOの特徴は科学の物理的法則のただ一つも汚してはいないということです。右の声明は円盤に用いられている推進方法に關して本人の完全な無知を示している

にすぎません。彼はきつとプロジェクト・マグネットの報告を読んだと思います。この報告は円盤の推進法は本来重力的なもので、地球の引力と磁場の変化をひき起こしたことを証しています。私がこのように言うのは、円盤は内部からコントロールされる重力場によって推進するという私の説を科学的な証明が裏付けていることを示すためにほかなりません。

重力場を持ったままで飛ぶ場合は船体の外壁に摩擦は起こらないし、衝撃波を発生することもないし、内部の人間が加速の影響を受けることもありません。これは時速百マイルでも百万マイルでも同様です。

この場合普通の金属が使用されても外壁に摩擦が生じないのは船体の周囲に「空気の膜」が付着しているからで、外壁の表面にたいして大気の影響はほとんど起こりません。しかしこの「空気の膜」は船体から放射される強力なフォースフィールドのもとにあるとイオン化し、応用される周波数やパワーによって各種の色光を放ちます。また船体から或る距離の所では船体の外皮空気は大気中を急速に通過し、おそらく空気同士の燃焼を起こすほどの摩擦を生じるものと思われれます。だからそのときは火球か流星と感違いされるでしょう。

重力場推進システムならば、時速一万マイルで急転回しようが、急停止しようが、乗員が座席ベルトをしめる必要もなければ、第一、急転回や急停止に気づくこともありません。高度のGフォースによる急転回の際は船体を推進する重力場が乗員の肉體の骨、血液、肉等の分子のすべてを同時に転回させる（同一方向に引く）ので、肉體の分子間にGフォースは存在しないのです。

UFOの實在に關する眞實の情報を公表しようとしぬ政府ののりくらりとした態度は、右のような円盤の高度な科学技術のせいです。政府は大衆にたいして、高度に進歩した空飛ぶ機械が地球の大気圏内を去来しており、リーダーや迎撃機をのがれたりするという事実を認める余裕を持ち合はせないのです。

しかし今のところ米空軍が面目を保つ事柄が一つあります。コロラド大学に三十万ドルを与えることによって空軍はドアを開きました。それは次のとおりです。「同大学は円盤が實在することを示す実質的な証拠を、突然に」見つける。同大学は一九六八年までに発見した事柄を大衆に教育しなければならぬ。空軍は大学が証拠を掘り出すまでは如何なる具体的証拠も持っていないかったと主張することにす」

ここで私に起こる疑問は、米空軍はその古い資料や彼らが選んだ百件の円盤事件の記録を大学に見せるかどうかということです。今やわれわれに必要なのは、空軍の古い資料を吹き飛ばすようなそして空軍の圧力を脱した研究対象物を大学に与えるような、新しい円盤の着陸事件や目撃事件の発生です。おそらく空軍も米中央情報局も陸軍の各種情報機関も、円盤の資料写真や過去二十年以上にわたってその間に墜落した円盤の残骸などを大学に譲るとはしないでしょう。

彼らは恐怖で青くなるまではこうした証拠物件を持っていることを否定するでしょうが、多くの古い空軍関係者で、かつては実状を知る地位にあった人々が今は民間人になつていてという事実を知るべきです。すでにかなりの年月が経過している今日、各種の制限は緩和されており、退役した元空軍関係者は円盤の墜落事

件を人々に話したり、空軍のプロジェクト・ブルーブック（注Ⅱ）
円盤の調査機関）の元要員たちが円盤の乗員と会見した事実など
を自由にしゃべっています。

私としては、巧みに歪曲された米空軍の円盤報道が徹底的にバ
カバカしくなっていますし、その説明には全然同意できません。
ただし空軍のインチキ報道が或る有益な目的に役立ったかもしれ
ないとは言えます。というのは、円盤の目撃は惑星または天空の
星々の見誤りだと空軍が言明する場合、事実の隠蔽が実際に行な
われているということも多く、懐疑論者にわからせるのに役立っ
ているからです。私は少数の頑迷な往生ぎわの悪かった懐疑論者
を知っていますが、彼らは米空軍の円盤声明がきわめて巧みに曲
げられたものにすぎないことを知ってから考えを変えています。
空軍の声明が過失であったということは多くの例でまず言えませ
ん。彼らは巧みにごまかす必要があったのです。

私は一例を記憶しています。一婦人が朝早く目を覚ましたとこ
ろ、庭全体を強烈に照らしている空中に浮かんだ一個の緑光体を
見ました。ところが空軍の説明では、この婦人が見たのは隣家の
納屋につけてある照明灯であって、これが霧の中でそんなふうに見
えたのだといえます。しかし新聞では、民間の研究者が調査し
たところ、婦人の家の付近には家になかったと報導しました。そ
こで空軍は戦術を変えて、婦人が見たのは霧の中で光った列車の
ヘッドライトにすぎないと声明しなおしました。しかし列車もト
ラックも当時走ってはおらず、霧に至ってはほとんど存在しな
かったのです。もはや空軍は一言も発しませんでした。懐疑論者が
円盤現象をもっと調査しようと思いたったのはこのような事件が

きっかけとなったのです。

多くの新聞記事には円盤の真相を空軍は隠していると研究者が
非難している旨が述べられていますが、むしろ新聞は「それは間
違っているのだから空軍は全く正直なのだ」とほのめかしてい
ます。しかし私はその意見には反対です。望む人には空軍のイン
チキ性を喜んで暴露しましょう。



ケアリフォルニアの
コンタクト事件

ヘンク・ヒンフェラー

円盤研究家のあいだでさえもジョージ・アダムスキーだけが他の惑星から来た訪問者とコンタクトしたと称するたった一人の人であるという誤った考えが広く行なわれている。

何かの理由で、人々はアダムスキーの物語については十分に知っているようだが、他のコンタクトティー（注：宇宙人と会見したと称する人）のことは何も知らないようだ。これは明らかにかのアダムスキーは自分のコンタクトを書物にして全世界に発表をしたけれども、他のコンタクトティーのほとんどはそうしなかった、という事実によるものである。それでアダムスキーより他のコンタクト物語は概して円盤研究家以外には知られていないのだ。

しかしこれまでに世界各地でアダムスキー型のコンタクト類は行なわれてきたのであって、われわれ（ニュージーランドUFO研究会）はその多くを真実なものと考えているが、コンタクトティーのほとんどは、比較的大衆に知られていない。

このような一人にシド・パドリックがいる。四十五才になるケアリフォルニア州人で、一九六五年一月三十日に円盤に乗って二時間をすごしたと言っている。われわれはパドリックの主張の真実性を個人的に保証できないが、本人を調査して、その話が真実であることを知ったという米国の信用のおける数名の仲間が独自に保証している。

これに基づいて読者が自分で判断し得るようにその物語を転載することは公平な態度であると思う。この記事はワシントン市のリトル・リスニング・ポウスト紙一九六五年八月十月号に掲載されたものである。

パドリックはサンフランシスコから七十五マイル下方の太平洋沿岸のラ・セルヴァ・ビーチ（ワトソンヴィルの付近）に住むラジオ・テレビ技師である。彼は一月三十日の午前二時頃自宅付近の砂浜にいたが、そのときジェット機のような音を聞いたので、見廻したところ、大きな航空機の黒い輪郭を見た。それは直径約五十フィート、高さ三十フィートあって、二枚の厚いコーヒータ皿を互いにかぶせ合わせたような形をしていた。彼はあわてた。走り始めたが、そのとき物体から声が響いてくるのが聞こえた。「恐れてはいけません。私たちは敵ではありません」パドリックはなおも走った。すると声は右の文句をくり返して次の言葉をつけ加えた。「私たちはあなたを傷つけるつもりはありません」そして中へ入れと呼びかけてきた。彼がゆっくりと引き返して行くとき、船体のドアが開いているのが見えた。歩いて中へ入ると背後でドアがしまった。部屋は六フィートに七フィートくらいの大さきで、別なドアが開いたのでそこを通り抜けると、一人の男が立っている。基本的な外観はパドリックと異ならないが、格好のよい顔つきをしていて、全身を包む一種の飛行服のようなものを着ている。完全な英語を話し、パドリックが相手に対して起こしている好奇心と同じような好奇心を相手も起こしているよう

だった。船中にいたあいだその船体は動いていたとパドリックは信じているが、どのあたりを飛んでいたかはわからない。船体外部を観察するためにあとでちょっと外へ出たら山中にいたことがわかった。その間船体の動きは全然感じられなかった。船内には二層になった床に十四の部屋があって、一階と二階とのあいだには小さなエレベーターがあった。船内には八人の男と一人の女がいたが、みな青白色の単調な飛行服のようなものを着ている。話しかけてきたのは最初の男だけだった。内部の壁には多くの装置がとりつけてあり、すごく複雑だ。他の男たちは各装置に向かつて仕事をしていたが、パドリックが入ったときさほど注視しなかった。或る個所には一個の巨大なレンズがあり、そこで葉巻型宇宙船(母船)が空間に浮かんでいるのが見えた。宇宙人は、自分たちは、多くの天体の彼方から来たと言った。再会の約束を得た後、パドリックは船内から出たが、そのときは四時頃だった。そして自宅へ歩いて帰った。

今月(今年八月)「リトゥル・リスニング・ポウスト」誌はパドリックとの長いインタビュー記事を掲げたが、われわれはそのテープを何度も聴いて徹底的な分析を試みた。質問の一斉射撃の弾幕下にあっても彼の回答は即時に行なわれ、常に明快で正確である。その調子には悪巧みなどはない。一日中パドリックやラ・セルヴァ・ビーチの住民を調査した結果では、彼は地元民の支持を受けており、彼の話に対抗した人はほとんどないということがわかった。

以下は「リトゥル・リスニング・ポウスト」誌の録音テープか

ら主要点を抜粋したもので、話はすべてパドリックによるものであり、判断は読者のものである。

問 その宇宙人たちはなぜ来たのか。

答 彼らは探検かまたは観察の理由で来た。彼らはもっと観察するためにまたやって来ると言った。主として人間を観察していたいと思う。地震や政府、政治上の事柄その他地球の未来に影響を及ぼすような事柄については何も言わなかった。将来はもっと多くの人を円盤に乗せるつもりであるという印象を受けた。各地のグループを乗せることから始めるだろうと思う。過去二ヶ月以内にニュージーランドの或るグループを乗せたと私は聞いている。(ヒンフェラー注)ここでパドリックは「私は聞いている」と言っているだけで「その宇宙人が私に語った」とは言っていない。このような点の誤った解釈から容易に誤解が生じるのである。

問 彼らはどこから来たのか。

答 彼らが語ったところによれば、彼らはわれわれが気づいている惑星のうち、側にある惑星から来たということだ。しかしわれわれはその惑星に気づいていない。相手の宇宙人は「地球人はその惑星に気づくことは不可能だ」とは言わなかった。ただ「地球人はその惑星に気づいていない」と言っただけだ。その惑星というのはこの太陽系内にあるのだと私は思う。

問 船内にはだれがいたか。

答 私やあなた方と全く同様の人間たちがいた。相手を恐れる必要はない。彼らは天使だともロボットだとも思わない。この人々はわれわれに何かの問題を提出するか、われわれと共に生命を危

険にさらすようなことはしないと、私自身のコンタクトから見て、こんなことは決してないと確信している。

問 宇宙人はどんな姿をしていたか。

答 彼らはみな五フィート九インチから十インチくらいまでの身長があり、体重は約百五十ポンドから百五十五ポンドくらいだった。女を除いてみな同じように髪を短かく刈っていた。女は髪が長く、背後へ垂らしていた。われわれは女のいる部屋へは入らなかった。ただドアのそばを通りすぎただけで、そのため女を親しく観察しなかったが、すごい美人であることはわかった。地球人の標準からみてみんなは二十才から二十五才のあいだのように見えた。みなきわめて若く、活発で、知的に見えた。男たちの髪は短かく波打っており、髪の色は暗赤褐色である。皮膚の色はすごく白かった。顔つきはわれわれに似ているが、一人だけ地球人とは大変異なる顔だと気づいた人がいた。それは何かの獲物に向かって身構えるような顔だった。だれもとがったアゴと鼻を持っていて、眼は異常ではない。明るい、深みのある、光った眼だ。彼らの指は私のより長く、手はたいそうきれいで、指はマニキュアを施したかのように見えた。

問 服はどんなものであったか。

答 全員が上下そろいのスリッポン型の服を着ており、その色は明るい青白色である。壁の色と同じだ。服にはボタンやジッパー類は付いていない。脚部は実際にクツの役目をしていて、それは腰部まで続く長グツのように見え、足首のところは途切れていない。ちょうど子供の雪衣のようだ。クツ底とカカトがあって、ゴムのような床を歩くとどしんどしんという音がした。服のカラー

には非常にきれいなデザインが施してあり、前方でV字型になっていた。首には毛皮のエリ巻きをし、それには実にきれいなモールが付いていた。それには色があったが、どんな色かは言えない。私がまだ見たことのないような色だからだ。すばらしくきれいな色だった。

問 相手は完全な英語で話したか。

答 全然なまりはなかった。この地球で話されている英語と同様に、はっきりとした完べきな口語英語だった。彼らはどんな仕事にでも自分を順応させることができるのだと思う。しかし私と話した相手は、船内の九人のうちで英語が話せるのは自分だけだと言っていた。

問 あなたの訪問中にテレパシーが行なわれたか。

答 私が相手の宇宙人に質問するたびに、相手は約二十五秒から三十秒ほど沈黙してそれから答えた。どんな小さな質問にも。おそらくどのように答えるべきかについてどこからテレパシーによる指令を受けていたのではないだろうか。乗組員が互いに話し合う場合もテレパシーで行なうのだと思う。他に意志伝達の方法が見えたらなかったからだ。

問 他の乗員はどんな反応を示したか。

答 私が室内へ入ったとき一同はチャリと見ただけで、すぐに仕事を続行した。まるで私には全然関心がなかったかのようにね。

(以下次号)

アダムスキーが帰ってきた？という
奇妙な物語

一九六六年二月二十二日英国UFO研究会の会合
におけるノーマン・オリヴァー氏とアイリーン・
バクル嬢の講演から要約したものである。

J・L・オトリ

ジミー・ゴダードの「ソーサー・フォーラム」誌一九六六年四月・五月に、最近の最も驚くべきコンタクト・ストーリーと思われる記事が出ている。ただしわれわれはただここに全貌を紹介してこの問題を考えるにすぎない。

この物語は英国のスコリトン事件と関連がある。目撃は昨年七月七日午後十時三十分頃に発生した。目撃者のブライアント氏がスコリトンの自宅でまさに寝ようとしたとき彼は船のタービンのような音を聞いた。外を見ると一個の薄青い光体が高度三百ないし四百ヤードで西から東へ飛んでいるのが見えた。この光体が下降するのが見えたが、そのうち光と音は消えた。

翌日彼がその地域を見まわすと奇妙な金属片が見つかった。曲がったブレイドの付いたタービンの金属のようなものもあるし、もっと複雑な機械のように見えるものもある。更に銀の砂の入った小さなガラスビンが一個あった（後日分析した結果、確実に銀粉であることがわかった）。また小ビン中には古代ギリシア語で「兄弟から兄弟へ」と記したメッセージもあった。また飛行体が着陸したと思われる個所には悪臭を発するゼリー状の小片があったが、これは急に溶けてなくなってしまった。

さて昨年の終り頃UFO研究会の幹事としての資格でオリヴァ

ー氏はできるだけ多くの興味を持つ人に質問表を送ったが、そのなかに次のような質問表があった。「あなたは円盤の目撃またはコンタクトの体験がありますか？」このアンケートがブライアント氏にも送られたのだが、その回答に「ある」と書かれてあったのに気づいたオリヴァー氏は詳細を知らせよと頼んだところ、氏から折返し六ページにわたる手紙が来た。そしてそのなかに一九六五年四月二十四日に発生したという驚くべきコンタクトの物語が述べられてあり、大気圏外から来た人々と会い、彼らと語り合っ

て、円盤の中へ入ったという体験が記してあったのである。その問題の日、ブライアント氏は自宅からスコリトン草原の方へ散歩に出かけた。目的地へ着いて村の方を振り返ったとき、大きな円盤が野原の上の明るい空中から出現して、地上約三フィートのところまで降りてそこで停止するのが見えた。すると円盤のまんなかに入出口が見えてきて、ドアが上方に開いてゆき、潜水用具のような物を着けた三人の人間が（ヘルメットを着用した完全装備である）出てきて、その一人がブライアント氏に向かって手招きした。

氏が彼らの方へ近づいて行くと彼らはヘルメットを脱いだ。そのうちの二人はたしかにこの世界の者ではない。異常に長い額と青い眼をして（これはネコの眼のようであった）金髪で、ずんぐりした鼻をしていた。彼らの口は青みがかったのだが、これは空気にたいする反応ではないかとオリヴァー氏は言う。着ている服は上下続きのもので、色は銀色で、人間たちが動く服がスズ箔でできているかのような音をたてた。みなベルトをしめていたが、それには奇妙な「太陽」または花びらのような模様があった。へ

メットには窓がついていた。また耳の部分には奇妙なユイルがあった。

三人目の乗員は同じような服を着ていたけれども他の二人とは異なっていた。彼は黒い髪の十四才くらいの少年で、着ている服は大きすぎるようだった。ブライアント氏の言葉によれば少年は「米語の味を含んだ中部ヨーロッパ人の話す英語のなまりがあった」という。

この少年がブライアント氏に次のように話しかけたが、これが氏の物語の要点である。

「今から一ヵ月後に私たちはマンテルの証拠を示しましょう(注||マンテル大尉事件のことか?) (オリヴァー氏注||このときブライアント氏はマンテルやアダムスキーのことを全然知らなかった)。夕方の青い光体に注意しなさい。生殖の目的で人々をつれ去ってゆくエプシロン(注||この意味不明)の勢力は危険です。この勢力があなたがたのいうポルタガイスト(注||音の精。不思議な音はこの精の仕業だといわれ、心霊現象の不可解な音の主だとも仮定される)を生じるのですが、これはあなたがたの生活の軌道にたいする無知のためです。私の名はヤムスキーです」

どこから来たのかと聞かれて彼は金星からだと言えた。(オリヴァー氏注||このときのコンタクトはアダムスキーがワシントン市で死去してから約十二時間後であったことは注目に価する)

このあとブライアント氏は助けられて船内へ入った。(このとき船体はまだ地面から約三フィート上に浮かんでいた)そして内部は数室の同じ型の部屋から成っていることがわかった。各部屋には隣室に通じるドアがあり、床にもドアがあった。各室に

は一個の寝台があり、それにはヒモが取り付けてあった。またテレビ受像機に似た大きなスクリーンがあって、その表面にはニジのようなさまざまな色光が上方に移動しているのが見えた。この船体はどのようにして推進するのかとブライアント氏が尋ねたら「イデオモーター運動」だという返事だった。(注||イデオモーターとは心理学用語で「観念運動性」という意味の形容詞)

このあとすぐに氏は船外へつれ出された。すると円盤は約四十フィート上昇し、続いて彼方へ消えた。

このことを聞いたオリヴァー氏とバクル嬢はただちにブライアント氏に会いに行った。最初の二時間はアダムスキーに関することは言わないようにした。ブ氏は五十一才で、三人の子供を持ち、その一人は十七才である。氏の話によれば円盤の外観はプラチナみたくで、近くの野原にいた羊たちは円盤が滞空しているあいだは無関心のようにだったが、円盤が離れたとき羊たちはその飛行を目で追うかのように頭をその方へ向けた。だがブライアント氏には見えなかった。彼は円盤に触れたが別に悪影響は受けなかったし、乗員たちも触れてはいけなとは言わなかった。円盤内の各室は同じ状態だが、一室だけは異なっていて、寝台の上に紫色の覆いがかけてあり、それには一輪のバラの刺しゅうが施してあった。ブ氏が円盤内へ入ったときの感じを「まるで賭金を勝ち取ったかのような晴ればれとした気持だった」と述べている。円盤関係の図書を読んだことはないという。

言葉による連想テストを行なってから慎重なやり方でオリヴァー氏はアダムスキーに関するあらゆることを話して聞かせた。するとブライアント氏が最初に答えたのは「あの少年はアダムスキ

「ではないでしよ」であった。

この後ブライアント氏とは数回の会見が行なわれて、或るときはデスモンド・レズリーも加わっていた。(注)レズリーはアダムスキーの「空飛ぶ円盤実見記」の共著者でア氏の親友)その際新たに次のような事実をブ氏は洩らした。

円盤には着陸用パッドが付いていたが、接地しないで常に三フットの高さで浮かんでいた。氏は乗員たちに助けられて中へ入ることができたが、彼らはこの高さを容易に飛び上がった。ヤムスキーが言った。「カルマは実際に作用します」そして今世における人間の働きは来世にその結果をもたらすというカルマの法則に言及した。また、ヨーヴィルの或る家の家族が生殖の目的のために(宇宙人によって)つれ去られたという。その家は今カラッポで、窓からのぞき込むと左手のストーヴの上にフライパンが置いたきりになっているともいう。この家は後に或る人が発見したが、ストーヴの上にはフライパンはなくスズのヤカンが置いてあり、網目カーテンはひどくよごれていて内部がほとんど見えず、ドアには南京錠がかけてあったという。

以上の講演をオリヴァー氏が終えてから次にバクル嬢がサイコメトリー(注)透視能力者が物品に手を触れてその由来を言いあてる術)の実験を行なった旨を話した。一能力者に或る目撃事件後に散乱していた金属片などを触れさせたところ興味ある結果が得られた。彼女はマンテル事件に似ていると思われる二、三の論点を持っていたのである。すると回答は次のとおりであった。

「船または飛行機が忘れ去られる……悲劇……恐怖……戦争ではない……戦争はあり得ない……」

天候を除いてすべて静寂……イングリッドが発見……まるで空飛ぶ円盤の中にいるようなブーンという音が聞こえる(バクル嬢はその能力者に円盤のことは話していなかった)また能力者は次のように言った。「この問題に興味を持っているのはあなただけではない。或る派の人々が興味を持っている」

右の話が終わってからドウル博士がブライアント氏と行なったインタヴューの録音テープを聴かせた。これがすんで否定派の旗頭であるクリアリー・ペイカー氏と激しい質疑応答が行なわれた。ペイカー博士が否定派というのはいさよとした驚きだが、博士が反論しなくても多くの人が反駁したのであることは想像に難くない。

だがここにかつてアリス・K・ウェルズがアダムスキーの死去に関して次のように報じたことをお知らせする必要がある。「アダムスキーの肉体は地球のものであるからそれは地球へ返さねばならないが、新しい肉体をもって仕事を続行する彼の英知に分断はない」

ブライアント氏はおそらくア氏の死を知ってはいなかったであろう。というのは彼のコンタクトはア氏の死後十二時間ほどして発生したからだ。しかしブライアント氏のコンタクトにはもっと驚くべき手がかりが秘められている。彼は「バラの刺しゅうのついた紫色の覆い物」について話しているからだ。

一九六二年三月二十七日にアダムスキーは他の惑星から来た宇宙船に乗って米国の航空基地を出発し、九時間後に土星へ到着した。そこで彼は十三名から成る会議に参加した。「会議の席上で着るガウンが全員に与えられた。私に与えられたのは優美な青色

で、右ソデにバラの花が刺しゅうしてあった」と述べている。

ブライアント氏が紫色と、優美な青色」との区別がつかないというつもりは毛頭ない。問題は氏が一九六二年にア氏の土星旅行の報告を読んでいたとは到底思えないという点にある。当時この情報は英国で三、四名の人にしか伝えられなかったのだ。

以上をもってただちにブライアント氏の体験をけなすことは容易だが、彼の物語を真実として受け入れるにはジョージ・アダムスキーなる人物について深い理解を要する。当分の間はオリヴァー氏の講演の題をくり返すだけでよいだろう。「アダムスキーは帰ってきたか？」と。

(注) アダムスキーが帰ってくるというのは、生き返るという意味ではなく、別な惑星で生まれかわって新しい肉体を得た惑星人として宇宙船で飛来することをいう。これについてアリス・R・ウエルズは、アダムスキーが生まれかわるとすれば幼児としてでなく、転生のときから成人者の肉体を得るだろうと言っている)

(20 ページより)

読み、聞き、見て、ア氏の所説に信頼をよせているだけでは力がありません。なんとしても『得』にまで到達しなければなりません。得にいたって、はじめて確認という言葉が使えらるるのではな

いでしょうか。(昭和四十一年十月五日記)

進歩には時間がかかる

ハリリー・ペレイラ

先号の『編集後記』で紹介したセイロンの円盤研究者ハリリー・ペレイラ氏は今夏来日され、かなり長期間滞京されたが、編者は都合により会えなかった。しかし在京の有志が会見し、アダムスキー問題その他について欲談することができたので、ここにペレイラ氏の談話の要点を掲載する。(編者)

もしあなたがたがスペース・ブラザーズの伝えた真理をすべての人々に伝えようとするなら、武力で人々をおどかさなくてはならないでしょう。

あなたがたがどんなにすぐれた政治指導者であっても、武力なしでただちに人々に伝えることはできません。けれども武力を使うことそのものが宇宙の法則に反します。武力によって起つ者はたとえスペース・ブラザーズの味方であれ武力によって倒されるでしょう。私たちが武力によって人々を真理に向かわせることは結局無理なことです。武力なしに自然に真理がひろまることが必要です。そのためには時間がいります。じっと忍耐して待たなくてはなりません。急いではいけません。今日明日に急激な進歩が行なわれるわけはありません。進歩は常に行なわれており、しかもわずかずつ行なわれるものです。それは現実の中にあります。私はあなたがた以上にブラザーズの伝えた真理を知っています

ん。アダムスキーやハニーについてあなたがた以上に知っていることはありません。私はブラザーズの伝えた真理を論理によって真実と認めています。宗教的見地や超心理学見地からではなく、形而上学的論理によって把握しています。とはいえ私も進化しつつある人間です。進化は永遠に続きます。完全ということはこの世にありません。どんなものも等しく進化の過程にあるのであり、私自身もこれから更に進化の階段を昇ってゆきます。こうして日本へ来て仕事をしたりするのも進歩の一つの過程です。これら一つ一つの過程を通じて私は進化してゆかなくてはなりません。それには時間がかかります。待たなくてはなりません。

神とは何かという間に一番ふさわしい答は「神とは生命をあらしめている力である」ということになります。したがってすべての生命は神なのです。

男性と女性が愛し合い、一緒に住むとき、避妊をしてはいけません。愛にしたがって子供が自然に宇宙の法則にしたがって生まれるのにまかせなさい。単なる性欲の処理のためだけの性行為を行なってはなりません。これは宇宙の法則に反します。現在の世界の最も悪い人道上の罪は避妊による産児制限です。なるほど産児制限は今日必要悪といえるかもしれませんが、けれども人類が産児制限を避けたいと思うようにならない限り進化の望みはない、それは破壊に終わるしかありません。

産児制限は悪い考え方です。そんな考え方をしなくても世界の人口のバランスをとる道はあります。あなたがたも避妊で墮落しないようにしなさい。これが大切だと思います。

The Small Society



健康について

— アダムスキー氏の所説にたいする解説 —

巽 直道

アダムスキー氏の所説の多くは、一般の常識を遙かに超えています。常識を超えた説を常識的に判断しても受持できるはずがありません。それなのに私は、ア氏のほとんどすべてに信頼をおいています。久保田氏の訳文を通して知っているだけにすぎないのに、そして十人のうち九人までが反発しているのに、なぜ信頼しているのだろうかと自問自答をしてみました。そしてえた答は「ア氏の一般常識を超えた所説の僅かな部分にすぎないが、その部分にたいする裏付けを、ア氏を知る前からやっていたし、今もなお、やりつつづけているからだろ」ということでありました。

人生にはいろいろな苦があります。昔から四苦八苦と言ってきましたが、私は病、庭、経、社の四苦にわけています。病は病苦、庭は家庭苦、経は経済苦、社は社会苦という意味です。これらの諸苦から立ちあがるために、私を訪ねてくる人びとがいます。その人たちのために十五年前から毎日、二時間ないし三時間の講座を開いています。個人面接ではさばききれないからです。受講する人たちは、一般の常識からわたりだしたところの、あらゆる手段をつくしてみたが、どうにもならなかったという苦の持ち主ばかりです。従って常識的な講義は何の役にもたちません。ほんとうに役だつためには、一般の常識を超えた知恵でなければなりません。

ん。この超常の知恵という点で、ア氏と一脈相通じるものがありました。

病庭経社の四苦のうちで、もっとも深刻であり、もっとも普遍的なのは難病苦です。従って、今でもそうですが、難病苦の人びとが多く受講にきます。それらの人びとに話している内容を、ア氏の健康に関する所説にあてはめてみることにしましょう。空飛ぶ円盤の真相 第九章を開きますと、健康についての次の言葉が眼につきます。

「金星の人びとは肉体の病氣というものを知らない——一五頁」この言葉は「地球の人類にも、病氣というものを知らない時が必ずくる」ことを暗示していますが、私は心から同意することができました。いつも私は次のように講義をしてきたからです。

「医学の進歩によって、私たちは無量の悪患を受けてきた。特に伝染病においてそうである。何千何万という人びとがバタバタと死んでいった実例が数多くあるのに、今の伝染病隔離病舎はどこも閉古鳥が鳴いている。しかしながら、その医学にもわけのわからないことがある。それは、

医学が進歩すればするほど入院患者の数がふえていくという事実である。医学が進歩すればするほど入院患者が減らなければならぬのに、こんな矛盾があるのは、どこかにまちがいがあるからである。これを正すならばたちまち入院患者の数は激減し、伝染病隔離病舎のように、大病院の病棟に閉古鳥が鳴くようになるだろ。ただし、ここで言っている医学とは生理学、衛生学、栄養学等を含めての医学である」

金星の人びとが肉体の病氣を知らないのは「緊張の束縛」を受

けないからだとア氏は教えています。正にそのとおりで、これが今の医学の重大な盲点となっています。地球の科学は「心が肉体とその各機能に及ぼす妻まじい影響を知りつつある——一六頁」し、また九大医学部心療内科等で実践に移して見事な成績をあげつつあるのは、まことに結構なことですが、盲点が消滅して入院患者の数が激減するのには、まだまだ非常な距離があります。

緊張を説明して「好き嫌い、批判精神などによって生じる緊張」とア氏は言っています。しかしながら「地球人がかかっている、ごくありふれた難病を治すことのできる知識」をえるためには、この緊張を段階的に分類したほうが、わかりが早いでしょう。マイナスの緊張による束縛をマイナスの感情という言葉におきかえて、私は次の五段階にわけています。(拙著「般若心経講義」を参照のこと)

第一次の習慣的なマイナスの感情は発病の因をつくり、第二次の習慣的なマイナスの感情はその病を増悪させ、第三次の習慣的なマイナスの感情はその病を固定させ、第四次の習慣的なマイナスの感情はその病の全快をはばみ、第五次の習慣的なマイナスの感情はその病を再発させる。これを精神の法則と呼んでいます。第一次のマイナスの感情というのは「一般の人びとは緊張、気苦労、その他あらゆる種類の感情が、どんなに自分の健康に影響を及ぼすかをほとんど知らない——一六頁」とア氏が言っていることです。具体的に言いますと、いかる、うらむ、にくむ、かなしむ、しんばいする。いらいらする、がっかりする、ぐちる、ひかんとする、おどろく、おそれる、不平不満、取越苦労といったような不快な感情のことです。

習慣的というのは「われわれの現在の状態は、昨日今日の結果ではなく、数年前にまかれた種子の蓄積——一七頁」とありますように、先月も今月も、去年も今年もと蓄積し続けてきたマイナスの感情という意味です。「地球人がかかっているごくありふれた難病」にからせる因はいろいろありますが、第一次の習慣的なマイナスの感情が主因です。この主因がなければ、他の因があっても発病することはほとんどありません。こう言っただけでは軽く、ああ、そうなのか「ぐらいなことで、ピンと心に響かないかもしれません。しかし、ここが最も大切なところですよ。この主因をつくらないことに地球人が成功しますと、金星人の無病に、よほど近づくことができます。ア氏は「人にせられんと思ふことは人にもまたその如くせよ」というイエスの言葉を度たび引用しています。これが難病の主因をつくらない秘訣でもあるからです。無量寿経には次のように出ています。

消除 三垢 冥 (三垢の冥を消除して)

広濟 衆 厄 難 (広くもろもろの厄難をすくわん)

三垢とは貪欲、私意、愚痴です。厄難を難病におきかえると、ア氏の説くところと全く同じです。三垢を三毒とも言っています。そのものずばりです。

第二次の習慣的なマイナスの感情というのは、病気そのものについていえるマイナスの感情です。「彼らは入院させられて休養しているあいだに気分を抑制することを知り、病気の進行状態にあまり気を使い過ぎていたことや、緊張を生み出していたことなどを悟るようになり、こうして新たな衰弱が起らないうちに体をゆったりさせることができたのである——一七頁」とア氏が言っている

る気の使い過ぎや緊張が第二次のマイナスの感情です。これを取り去らないと、新たな衰弱がおこり、その病は増悪します。般若心経は気の使い過ぎを望微、緊張を恐怖という言葉で表現し、これを消除しなければ苦厄は解消しない、その難病は治らないと教えています。

第三次の習慣的なマイナスの感情は、第二次のそれに続いて生まれる感情です。常識的によいと思われるあらゆる手段をつくしても治らないということになりますと、自分の病気は治らないものと思ひこんでしまいます。そして、私の体にはこんな病気があ
る、私は病気だ、というマイナスの感情を固定させてしまいます。「肉体内の状態は心の緊張の反映にすぎない——一七頁」とア氏が教えていますが、マイナスの感情を固定させると、その病気も固定してしまいます。「個人の心が協力を許してやる限り、各部分はその義務を自由に楽しく遂行——一六頁」してくれませんが、マイナスの感情は病んでいる器官の全細胞に対して、義務を遂行するなど命令しているに等しいのですから、その病気は治るはずがありません。「汝自身を楽しい想念の宿となせ——一九頁」とあるのに、汝自身を第三次のマイナスの感情の宿としていては、汝自身の病気はいつまでも治らない道理です。(ア氏は第四、五次の習慣的なマイナスの感情にはふれていないので省略します)以上
の解説は、大学病院でもてあましがちな難病を治すのにはどうしたらよいかを、はっきりと明示しています。第二次の段階にある人は、第二次のマイナスをプラスに転じたらよいわけです。第三次の段階にある人は、第三次のマイナスをプラスに転じたらよいわけです。ほとんどの難病は即座に、あるいは数日のうちに

全、軽快に転じます。イエスはマイナスをプラスに転じることにおいて名人でありました。ですから難病が即座に治り、中風は立ちあがり、全盲の眼はあいています。その場合

汝の信ずるところを汝になれ

汝の信仰なんじを救へり

とイエスは言っています。マイナスをプラスに転じるための唯一の方法は、信の一字につきまるといふことです。言葉をかえて私は

思いこむことは必ず実現する!

と言っています。しかし、今まで治らないのに、治る、治していただけると思ひこむことは、常識ではまず不可能です。獨諦、羯諦、波羅羯諦と、般若心経が教えているのはこのためです。私が反復の技術と呼んでいるのはこのことです。(ア氏著久保田氏訳、生命の科学四二頁を参照のこと)

難病にたいする超常の考え方を私は十五年間、毎日、実践に移してきました。あらゆる難病の人々が受講しますが、九〇%の高い比率で全、軽快しています。従って、ア氏の考え方の正しさを確認している点では、私と同じ程度の人はあるかもしれないけれども、私以上の人がいるとは思えません。しかしこれは健康にたいしてだけです。ア氏が教えている超常の知恵は非常に広い範囲にわたっています。その一つ一つについて、難病にたいするのと同じ程度に確認していきたいものです。

古人曰く、聞くべし、見るべし、得るべし。また曰く、得ずんば見るべし、見ずんば聞くべしと。(正法眼蔵隨聞記第六)

一八九七年の不思議な飛行船

ジェローム・クラーク

それは一八九六年十一月に米国ケアリアフォルニア州北部で始まった。真実、半分真実、全くの虚報など混乱した雑多な記事を流していた北部の各新聞は、その月中と十二月にかけてどれもが全然知らなかった物の出現についてセンセーショナルな記事を掲げた。ただしほとんどの人は意見を持っていて、その物を見なかった人は多数の仲間がそれによって全く狂っている証拠とみなした。その物を見た人は自分の正気を鑑定するのは自分こそ最適格者だと自任しながらその物を「飛行船」と呼んだのである。その「飛行船」は人間の操縦する或る種の航空機で、強烈なサーチライトを持ち、人間らしき乗員が乗っていて、風に逆らって飛ぶことが可能で、接近したときに着陸して離陸したと彼らは主張している。

十二月以後になると報導はなかった。熱心に興味を持ち続けるUFOファンもいなくなつて、大衆は飛行船の話を急速に忘れてしまい、もつとさしせまつた関心事のほうへ目を移していった。

ところが一八九七年三月になつてまたも飛行船が――または飛行船群が――現われた。今度は米国中西部と西部一帯にかけて数千名の目撃者の面前で大挙して出現したのである。この現象がすぎ去つた頃までには――それは五月のことだが――このUFO物語の最も重要なしかも無視された章の一つが終つていた。この記事において私が強調したいのは、飛行船の

「出現」という事実よりもむしろ一般のUFO問題に関連したその有する意義である。私や他の数名の人がこれまでに公にした報告は、一八九七年の前記の事件に関する報導のごくわずかな部分にすぎないが（もっと決定的な、詳細をきわめた研究が今後発表されることが望ましいのであるが）、この神秘的な事件を絶えず調査することはきわめて重要なパタン（原型）の存在をたしかめるのにもつぱら役立つのであつて、目撃報告のいくらかを調査した後にこそそのパタンの持つ意義にわれわれは注目するようになるのであつて、このパタンのなかにわれわれは過去と現在のあらゆるUFO事件のナゾが見られるような気がするのである。

一八九七年の三月下旬に例の飛行船がキャンザス州とネブラスカ州上空に再び現われた。現代のUFO騒動の初期の段階に見られるように、その目撃も徐々に始まつたのではない。そして私の通信者の一人が述べた、この飛行船が一八九六年十二月以後はケアリアフォルニア州から東方へ移動したという見解が正しいとはいえない。一月から三月中旬までは飛行船の報告が全然なかったが、その後突然驚くべき数の報告が開始したのである。

われわれが知る限りでは三月二十五日にキャンザス州ベルヴィルから最初の報告が行なわれている。その町で午後十時に一機の「ナゾの飛行船」が（形状は不明）町の上空を通過したのを少なくとも五十名の市民が目撃したと新聞は述べている。（それは続く二夜にも出現した）しかしこれに先立って、主としてキャンザス州北部とネブラスカ州南部の牧場労働者や農民たちによって目撃されていたようであるが、ロバート・ヒバードの証言が信頼に価するものならば、アイオワ州も少なくとも一回は飛行船の訪問

を受けたかもしれない。スー市の北方十五マイルのところまで農業を営んでいるヒバードの話によれば、三月下旬の或る夜、飛行船の後尾についている引き綱からぶらさがっている「イカリ」が彼のズボンのたるんだ部分をひっかけたという。一新聞は伝えた。「彼はこれまでに正直な人間だという評判通りの人間であった。世論としては彼がその異常な体験を持ったかまたは夢を見たということになっている」

ネブラスカ州リンカン、ピアトリス、同州内の他の場所や、キャンザス州メリーズヴィル、ワシントン、ハダムなどにおける目撃に関する別な情報源がある。

二十九日の夜、ネブラスカ州オマハの一教会から出た参詣者たちは、空中を通過する一個の不思議な物体を見た。それは空中に停止して再び飛び去った。三十分間も見えたのである。その後まもなくオマハの南東地区の住民たちも大きな輝く光を放つその飛行船を見たが、「気球にしては大きすぎる」物であった。ゆっくりと、しかも地面近くを飛びながら、町の郊外で一連の示威運動をやったあと北西に消えていった。

この飛行船の最上の報告のいくつかは四月一日の夜に出されている。この夜ミズーリ及びキャンザス両州で目撃が発生したのである。八時十五分にキャンザス市で「数千の人々が不思議な光体を見た」とその町の新聞は報じている。それは西から北へ南へと動き、次に北へもどった。高度はさまざまであった。地面近く下降したかと思うと急速に飛び上がる。

キャンザス市「タイムズ」紙によれば次のとおりである。

「その光体は街路燈ほどの大きさで、雲の高さにあるように思われなかった。サーチライトによく似た一条の光線を放っていた。しばらくはその光が白かったが、次に明るい赤色に変化した。その大体の進路は北西に向かっていたが、数度後退してしばらく逆の方向へ進向した。規則的な運動によって動き、スイ星のような運動ではない。北方の地平線の彼方へ消えて行くのを見たという人もある」

キャンザス州エヴァレストの市民は同夜その飛行船を一時間二十分ほど観測して、その現象のとりわけ詳細な光景を見ることができた。

「いっとき五分間ばかり飛行船は空中に低くたれて雲の下端に沿って動くように思われたが、船中の強力な光線（複数）が雲に反射したために船体の輪郭がはっきり識別された。

ゴンドラは二十五ないし三十フィートばかりの長さに見え、インディアンのカヌーのような形をしていた。四枚の軽快な翼が舟から突き出ていて、二枚の翼は三角形である。大きな黒い船体がゴンドラのすぐ上に見られ、これは大体に膨張したガス袋らしいと観測者たちは考えている。光を放つのと同じ力が船体の浮揚に應用されていることは、飛行船が上昇するとき光が弱くなり、地表に近寄ってくると光は機関車の光のように強くなることからして明白であった。白や赤以外に青色が現われたと一撃者は述べている」

一八九七年のメンゼルともいふべき一匿名氏は（注||メンゼルは現代の有名な円盤否定論者）、それは全然飛行船ではなく金星だったのだと説明したが、これを聞いた一撃者が鼻息を荒

くして言った。「金星がすばやく動きまわったり、地平線を横切
って急速に飛んだり、地上に向かって急降下したり、大きく飛び
去って南の空に消えたりするものか」

同夜キャンザス州レヴンワース砲台の一衛兵が飛行船を見た
報告したが、これは結局、本人がこのことをしゃべり続けるなら
ば精神病の理由でクビにされるかもしれないと注意されるに終わ
っただけだった。しかし大抵のキャンザス州民はこの神秘的な飛
行体についてはるかに心が広いように思われた。それで飛行船は
州民のあいだで好みの話題となったのである。飛行船というもの
はいつか武器として使用されるかもしれないとほのめかしたレヴ
ンワース砲台の一技師は言った。「ちょっと考えてみたまえ。軍
団を乗せた飛行船が都市の上空へやってきて、あらゆる大きさや
種類の爆弾を下界の人間のなかに落とす光景を。殺りくはもの
すごいもんだらう。或るときの戦争は別なときの戦争にくらべれ
ば子供の遊びみたいなものさ」

2

キャンザスからはるか離れたミシガン州の中西部高地にあるゲ
イルズバーグ村の上空を飛行船が飛んだのは四月一日の夜のこと
であった。これは一八九七年中の出現騒動に一機以上の飛行船が
いるというを示す多くの証拠の一つである。目撃者たちは強い
光を見たが、それは船体のぼんやりした輪郭をあらわしていた。
しかも船体からモーターの音らしい奇妙なパチパチいう音と、は
っきりした人間の声とが聞こえてきたのだ。

四日後に数百のオマハの住民は約四分の三マイルの高度で飛ぶ
／＼の葉巻型物体を目撃した。五分間見えてから風に逆らって雲
の中へ入り込み、まもなく現われてから、依然として風に逆らい
ながら高速で北の空へ消えていった。

九日と十日の夜には三つの州にわたって飛行船の目撃事件が爆
発的に発生した。目撃の行なわれた地域をあげると次のとおりで
ある。

四月九日にオクラホマ州ノーマンで、ノーマン州立銀行の現金
係次長の、まじめな人で、敬けんな教会メンバーである「T・J
・ウィギンズ氏は「長くて黒い物体を見たが、それは端にたいそ
う強い光を放っていて、両横腹には赤い閃光がきらめいていた」
という。(これから二日後に、ノーマンのほとんど四百名の人が
これと同じ現象を目撃したと言っている)

イリノイ州ではエヴァンズトン付近の湖の上空に強く光る物体
が低く出現し、それから西方へ向かって町の上空を妙な飛び方を
して行った。これは同時にナイルズ・センターとシャーマーヴィ
ルでも見られたが、距離はうんと遠かった。

九時三十分にはシカゴの南部市民が湖の上空を横切る飛行体を
目撃。これは奥地へ飛び、ゆっくりと北西に転じて、暗黒のなか
に消えた。シカゴ「トリビューン」紙四月十日付に次のように載
っている。

「その動く驚異的な物体は、数カ所において小望遠鏡や双眼鏡を
用意した人々によって観察され、この人たちは光を帯びた物体の
輪郭をスケッチしたと言っている。高度不明の空中を進行する物
体の容積の見積りとしてあやふやな根拠だが、一同の意見として

一致したのは、主胴の長さは約七十フィートで、細長くて弱そうな構造であるという点であった。

この胴体には動くヘッドライトや他の光がついていたといわれる。数名の目撃者は主胴のすぐ上に翼または帆に似た、横に突き出た物を見たという。この物は巾約二十フィートあるように思われ、一方の側から見たときはその長さは正確には測れなかった。

最初の目撃者の一人である若い宝石商は、その飛行船は実際には二つの葉巻型の胴が桁でもって連結されていたと主張している。この目撃はたそがれどきに起こったので、他の目撃がほとんどが暗闇のなかで発生しているところから、私の意見では、この宝石商の目撃こそたぶん飛行船出現に関して最も正確な記述として、まじめに取り上げねばならないものと思う。

物体の長さの判断を文字通りに受け入れてよいとすれば、次の例がある。エヴァンズトンやシカゴ南部の物体より小型の飛行船が午後八時四十分イリノイ州キャロル山の上空を通過し、西方に転じて「ものすごいスピードで」あっというまに消え去った。目撃者によれば、この物は長さ約八ないし十フィートで、高さは二ないし三フィートばかりであった。形は長円形で大きな赤色光を放っていた。

次はアイオワ州の四月十日。ニュートンでは午後八時に二千の市民が一個の飛行船を見たが、そのとき四十分間も市の南西部上空に停止していた。そのあと北西に向かったが、光のついたパラシュートの如き物を落とした。目撃者のなかにはこれは乗員からのメッセージではないかと思つて探しに出かけた人がいたが、新聞記事は探査者たちが何を見つけたかどうかを述べていない。

この飛行船はまた七時二十五分にエルドン、七時四十分にはオタワ、八時十分にアルビア各町の上空にも出現した。

イリノイ州では強烈な白光を放つ不思議な物体がゲイルズバリー上空を飛ぶのに十五分を要した。双眼鏡でそれをながめた観察者たちは高度を四分の三マイルと見積っている。

こうした活動のすべてはノースウェスタン大学のジョージ・ホウ教授を笑わせた。「オリオンのアルファ星が一千万年天空の一定の軌道を進行してきている。それで過去三週間それが停止して不思議な空中の物体のヘッドライトとして認められた理由が私にはわからない」もちろんホウ教授は彼のいう「まぬけな同胞」が「飛行船と呼んだ物体を自身で見ただけではない。自分にはもっとよい仕事があると彼は言う。

エヴァンズトンのジョーゼフ・ピアセンは赤、緑、白などの色光を見たが、それは二個の葉巻型物体を映し出した。その物体はヒューッという音を放った。いかにも皮肉そうに彼は強調する。「この物体はオリオンのアルファ星とは完全にはずれたコースをとっていたなあ」

3

十五日の夜、サウス・ダコタ州のハワードからアーティージャンまでずっと一機の飛行船が汽車を追いかけた。車掌のジョー・ライトがマディソン・センチネル紙の記者に語ったところによると、日没直後に現われて次第に地面に近づきながら飛び、やがて「視界から消えた」という。どうやら着陸したらしい。

別な飛行船がキャンザス州ユールカで同夜九時に人々により目撃された。うわさによれば別な飛行船が高度六百フィートでワシントン市のワシントン記念碑に接近し、それからジョージタウンに向けて飛び、市の背後の丘の彼方へ飛び去った。

二十四時間後にテキサス州の六つの都市で「メキシコ葉巻に似た形の飛行船を見たが、これはまん中が大きくて、両端が小さく、巨大なチョウの如き大きな翼を持っていた。それは二つの大きなサーチライトの光線によって明るく照らし出されたが、風のような速さで南東の方向に航行しており、壮大な外観を呈していた」(ニューヨーク・サン紙)

三日後の午後九時に一個の巨大な物体がウェスト・ヴァージニア州シスターズヴィルの地上をサーチライトで照射した。一記者によれば次のとおり。「強力な双眼鏡で調べたところ、両側に大きなヒレのついた百八十フィートの長さの巨大な円錐形の物体であるという印象を受けた」

4

四月十九日にはこのUFO騒ぎのうちで最も興味ある報告類の二つを生じた。一つは有名なシスターズヴィル事件(前述)で、これはキーホートの著書『空飛ぶ円盤は事実である』にもっと詳細に述べてある。他の一つは最近まで公表されなかったキャンザス州レロイの技手の報告で、UFO物語の記録中最もすばらしいものの一つである。目撃者はきわめて信頼に価する人だったように、しかもキャンザス州の一通信者の努力によって、本人の主張にた

いする詳細な裏付けを私は入手することができた。

一方キャンザス州イエイツセンターの、ファーマーズ・アドヴァケイト紙、一八八七年四月二十三日付は次のように報じている。

「ヴァーノンのアレグザンダー・ハミルトン氏は前の水曜日(四月二十一日)にこの町へ来て、うわさの種になっている飛行船を見たと声明してかなりの反響を起こした。氏は古い移住者で、初期の州議会の議員であったので、ウッズスン、アレン、コフィー、アンダスン各郡にわたって知られている人である。氏は新聞社に次のような話をした。

「先週の月曜日の十時半頃、家畜の騒ぎで目が覚めた。たぶんブルドッグがいたずらをしているのだろうと思いつきながら起き上がったが、戸口まで行って仰天したことに、家から約四十ロッド(二百二十ヤード)離れた牛の囲いの上空から一台の飛行船がゆっくりと下降するのが見えるんだ。

小作人のジド・ヘズリップと息子のウォールを呼んでから、みんなはオノをつかんで家畜囲いのほうへ走った。一方飛行船は静かに下降を続けて、やがて地面から三十フィートばかりのところまで来た。われわれは五十ヤード以内に近づいた。それは長さ三百フィートと思われる巨大な葉巻型の胴体とその下部につり下がったゴンドラから成っていた。

ゴンドラはガラス板または他の透明な物質と、何かほかの巾のせまい細長い材料とが交互になったものでできていた。内部は明るく照らされていて、あらゆる物がはっきりと見えた。照明は三つあった。一つは強烈なサーチライトに似た光で、他の二つは小

さい光だ。前者は赤色で後者は緑色だ。大きな光はあらゆる方向に向けることが可能だった。

内部には私がかつて見たことのない奇妙な人間が六人乗っていた。二人の男と一人の女、それに三人の子供だ。彼らはペラペラしゃべっていたが、われわれは一言も理解できなかった。その乗物の透明でない部分はすべて暗赤色を帯びていた。

われわれは驚異と恐怖に満ちたまま黙って立っていた。すると何かの物音が相手の注意をひいたのでわれわれに光を向けてきた。ただちにこちらの姿をとらえて、何かわからないパワーにスイッチを入れて、飛行船の下部でゆっくり回転していた径約三十フィートのタービン車が、ちょうど選別機のシリンドラーの音のように唸り始めて、飛行船は鳥のようにふわりと浮かび上がった。

頭上約三十フィートまで上昇したとき、それは停止して、サクの中でわめいて飛びまわっている三才の若い牝牛の真上にとまっていたようだった。そのほうへ行ってみると、太さ約半インチで、同じ赤い材料でできた綱がその子牛の首のまわりに引き結びで巻きついていて、一方の端は船体へつながっているのがわかった。

われわれはそれはずそうとしたが、できなかつたので、綱を切り離れた。だが船体や牛やすべてがゆっくりと浮かび上がって飛び始め、北西の方に消えてゆくのを驚き呆れて見ながら立っていた。一同は家へ帰ったが私は全く恐ろしかったので眠れなかった。しかし火曜日の朝起きて馬に乗り、牛の行方を探しに出かけた。だが夕方レロイに帰ってみると、レロイから約三、四マイル西方の、コフィー郡に住んでいるランク・トーマスがその日彼の畑である牛の皮や足や頭を見つけたことがわかった。

だれかが盗んだ牛を殺して皮を投げ捨てたのだと考えたトーマスは、身元確認のためにそれを町へ持って行ったが、柔らかな地面に何の跡も発見できなかったのだ、すっかり首をひねっていたのだ。私は昨夜家へ帰ったが、眠り込むたびにあの強烈な光を放つ、いやな人間たちの乗った、眠り込むたびにあの強烈な光を放つ、あれが悪魔なのか天使なのかはわからないが、われわれみんなはあれを見たし、私の家族の者もみな飛行船を見たのだ。だがあんなものともう関係を持ちたくない」

ハミルトン氏はショックから完全に立ち直っていないようだった。また氏を知っている人のすべてが、氏の言葉はすべてまじめであることをよく知っていたと、「アドヴァケイト」紙は結んでいる。同紙はハミルトンをよく知っている町の知名士の証言も次のように掲載している。

「ありそうもないような物事の真相が提示されるときは必ず疑う人や信じない人がいることは現在もそうですし、過去もそうでしたし、未来においてもそうでしょう。無知か疑い深い人は右のハミルトン氏の陳述の真实性を疑うであろうことはわかっていますので、私たち署名人一同はここに次の口供書に偽りのないことを宣誓します。

私たちは十五年ないし三十年間アレックス・ハミルトンを知っていますし、彼の言葉が人から疑われたことがないという事実からして、彼の飛行船に関する話が真実で正しいものであることを心から信じます。

- H・H・ウインター（銀行家）
- H・S・ジョンソン（薬剤師）
- アレックス・スチュアート（治安判事）
- F・W・パトラー（藥屋）
- H・C・ロリンズ（郵便局長）
- M・E・ハント（郡治安官）
- E・K・ケレンパーサー（医学博士）
- J・H・ステイチャー（弁護士）
- H・ウエイマイアー（藥屋）
- ジャス・L・マーティン（証書検認官）

右は公証人立会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年四月二十一日

公証人 W・C・ウィリー

ハミルトンの物語をコピーしてからパーリントンの『デイリー・ニューズ』紙は別な宣誓書を掲載した。

「キャンザス州パーリントンの住民たる私たち署名人は、アレグザンダー・ハミルトン氏が一八五五年にミズーリ州から追放されて以来氏を知っていること、（これはどうやら当時のミズーリ州とキャンザス州が闘争中の奴隷解放問題に巻き込まれたことに言及したものらしい）氏がコフィー郡の最初の郡主事であったことと、どの点から見ても全く誠実で信頼できる人物であることなどをここに証言します。真実を愛する人は氏の如何なる陳述をも決して疑わないでしょう。」

- J・M・レイン
- H・E・カウゼル
- オーソン・ケント
- W・M・マンソン
- M・E・グリメス
- J・E・グリメス
- J・M・ポールドウイン
- デイヴィッド・グリメス

右は公証人立会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年四月二十九日

公証人 H・B・チェニー

ハミルトンの誠実さを示す証拠の最後のものは彼の孫娘たちによって示されている。（この物語で『ウォール』という名で出てくる息子のウォーレス・ハミルトンの娘たち）最近一九六五年にキャンザス州トピカのハリー・フリーナー氏が彼女らに会ったが、二人の婦人が氏に語ったところによると、この物語はハミルトン家では有名な話となっていて、祖父は一九一二年に死ぬまで不思議な飛行船と不思議な乗船者が子牛をさらって逃げるのを見たと言張っていたという。彼女らの父（ウォーレス）は人から嘲笑されるのを恐れてか、この問題を語ろうとはしなかった。

申し立てによれば同じ頃に発生したという次の「技手」の物語は（正確な日時は不明）、裁断がさほど容易ではない。目撃者の人柄に関する情報が少ないからである。だがこの人はかなりすぐれた人だったらしい。彼のうわさは一体に良好である。まだはるかに「俗っぽい」飛行船目撃事件類をかつては嘲笑していた。「ア・カンソー・ガゼット」紙でさえも、この事件を「最も真実な物語」と称した。

話の主はジェイムズ・フートンで、よく知られたアイアン・マウンティン鉄道の車掌と述べられている。

「もちろん私は飛行船を見た。これは絶対に間違いない。だから私が話すことを信用してよろしい。それはこんなふう起こった。

私は臨時列車を回送するためにテクサーケアナへ行っていた。そしてテクサーケアナで八時間ないし十時間の余暇がとれることがわかっていたので、少しばかり狩猟をするためにホーマン（ア・カンソー州）へ行った。その場所へ着いたのは午後の三時頃だった。狩猟はうまくいった。それで駅へ引き返そうとし始めたのは六時すぎからだった。ヤブの中を歩いていると聴きなれた物音が耳についた。どうみても機関車の空気ポンプの作動音に似た音だ。

私はすぐに音のする方へ行った。すると五、六エイカーばかりの空地で音をたてている物を見た。「驚いた」と言ってみたとこゝろで、そのときの感情をとて十分にはあらかせぬ。すぐに私は、こいつはあちこちで多くの人が見た有名な飛行船だと思っ

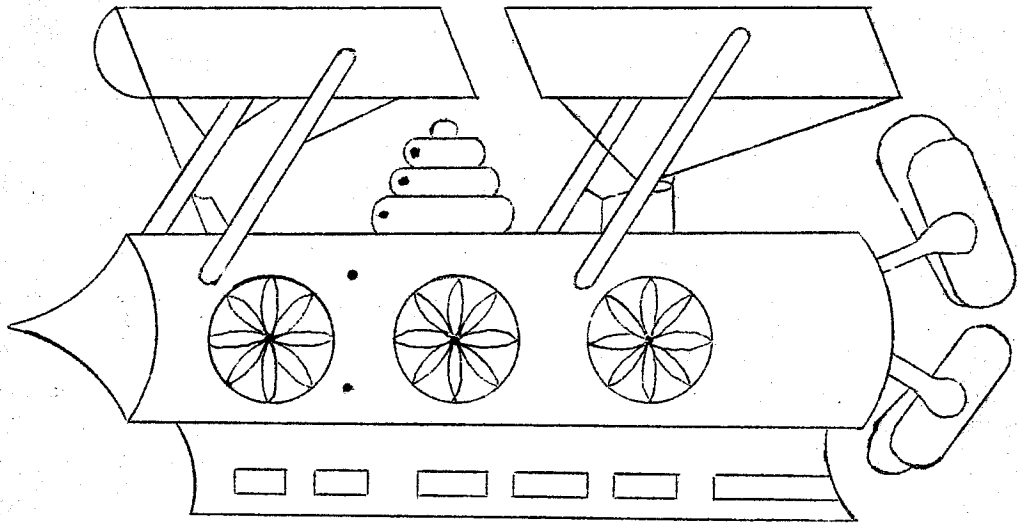
船内には中くらいの身長の方が一人いたが、その方は黒メガネをかけていた。彼は船体の後尾と思われるあたりで修理をやっていた。近づいてみて私は驚きでもものも言えなかった。相手は驚いて私を見て言った。「こんにちは。こんにちは」私は尋ねた。「これが例の飛行船ですか？」「そうです」と相手が答えた。すると船の竜骨とおぼしきところから三、四名の人間が出てきた。

よく調べてみると竜骨は二つの部分に分かれていて、ナイフの鋭い刃のように前方で合してとがっており、船体の横腹はまん中が次第にふくらんでいる。両横には曲がる金属で作られた三つの大きな車がついていて、船体が前進するにつれてそれがへこむようになっているのである。

「失礼ですが、その音はウェスティングハウス社のエアブレーキによく似ていますね」と私は言った。「たぶんそうでしょう。これは圧縮空気と飛行翼とを使っているのです。だがあなたはあとでくわしいことがわかるでしょう」

「準備完了です」とだれかが叫んで全員が下へ姿を消した。見ていると、各車の前にある二インチの管が車にたいして空気を噴出し始めて車は回転を開始した。すると船体はシューッという音をたてながら次第に浮かび上がった。突然翼が前方へはねて鋭いフチを空の方へ向けた。次に船体の後尾にあったカジが一方へ回転し始めた。車が急速に回転したので車の回転翼はほとんど見えなくなった。そしてあっという間に視界から消えてしまった。

ここに描いた絵はこのような事情で私が描き得る最上のものだ。私は飛行船を見ることができて幸運だったと思う。船体が静止していたあいだ、何かのエンジンの空気ポンプみたいポンプを使



フートンがスケッチした飛行船

用していたと言つてよいだろう。私がおぼえている一つの特徴は
一 排障器（機関車や電車の前につけて線路上の障害物を取り除く装
置）に似た物がナイフの刃のように鋭くて、ほとんど針のように
とがっていたという点だ。船体のまわりにはよく整った機関車に
は当然ついていると思われるベルまたはベルのヒモはなかった」
フートンがスケッチした飛行船の図は、見たところバカらしく
て、ありそうもない物のような印象を与え、この物語を全面的に
受け入れるのに障壁となるかもしれないが、一方それは飛行船存
在の状況証拠となるかもしれないのである。これにやや似たよう
な飛行船（複数）が以前に報告されているし（特にシカゴ南部の
飛行船目撃事件に注意）、横腹の扇風機型車輪は、一八九六年の
ケアリフォルニア州の目撃（複数）でも著しく目立っていた。そ
のことをフートンが知っていたとは考えられないことだ。前述の
アレグザンダー・ハミルトンが推進機構と関連した「車輪」の存
在を報告したことを忘れてはならない。ただしこの場合は車が太
きくて、横側ではなく船体の下部にあった。更にフートンの見た
飛行船は一八八〇年にニューメキシコ州を横切った不思議な物体
との明確な類似性を帯びている。

6

一八九七年の飛行船目撃騒動は四月の第三週以後にたしかにピ
ークに達した。ただし五月まで散発的に発生は続いていた。しか
し一つの実例だけは詳細に述べるに値する。

以下の証言はアーカンソー州のホットスプリングズの二人の官

官憲サンプター警官とマクルモアー郡治安官補の目撃談で、申し立てによれば二人は公務中に一機の飛行船とその乗員たちを見たという。

「一八九七年五月六日の夜、この町から北西に向けて馬で疾走中、われわれは天空高く一個のきらめく光体を認めた。突然それは消えたが、われわれはそれについて一言も発しなかった。犯人を捜査していたので物音をたてたくなかったからだ。丘々のあいだを通り抜けて四、五マイルばかり乗りまわしてから再びその光を見たが、今度はかなり地上に近づいているように思われた。二人は馬をとめてそれが降りてくるのを見つめた。やがて急にそれは別な丘のかけに消えてしまった。二人が更に半マイル前進したとき、両方の馬は動かなくなった。すると約百ヤードむこうにライトを持って動きまわっている二人の人間が見えた。銃を手にしながら——というのは今や事の重大さを十分に認めたので——われわれは呼びかけた。「だれか？ 何をしているのか？」

長く黒いヒゲをはやした一人の男が片手に燈火を持って前方へ出てきた。そこでわれわれ二人の身分を明かしたところ、相手は自分と他の二人——若い男一人と女一人——計三人でもって飛行船に乗ってこの国を旅行中である旨を語り始めた。われわれは飛行船の外形をはっきり識別できた。それは葉巻型で約六十フィートの長さがある、最近の新聞に出ている飛行船の図にきわめてよく似ていた。あたりは暗くて雨が降っており、若い男は三十ヤードばかり離れたところで大きな袋に水を入れている。女は暗闇の中で一人だけ背後に控えていたが、手にカサを持って頭上にさしていた。ほおヒゲをはやした男がわれわれに飛行船へ乗らないかと

誘いかけて、雨の降っていない場所へつれて行こうと言う。われわれはぬれているほうがいいのだと言った。

船体の強い光がたびたび点滅するのはどういうわけかと男に尋ねると、その光はきわめて強力なのでパワーを多く消耗するからだと言った。ホットスプリングズに数日間滞在して温泉に入りたいのだが、時間の余裕がないのでそれができないと言う。彼らはこの国を十分に見てからテネシー州ナッシュビルで解散すると言った。急いでいるのでわれわれは別れたが、帰途約四十分後には何も見えなかった。その飛行船が飛び立つ音を聞きもしなければ見もしなかった。

ジョン・J・サンプター

ジョン・マクルモアー

右は公証人の立会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年五月八日

公証人 C・G・ブッシュ

フォート・スミス市の「デイリー・ニューズ・レコード」紙は、「サンプターとマクルモアーは手ひどい嘲笑を蒙ったけれども、両氏はその体験が絶対に真実であると主張している。しかも両氏の真剣さは、その物語を事実として受け入れられぬ一方で両氏がふざけているのでないことを知っている多数の人々を迷わせている」と報じ、「アーカンソー・ガゼット」紙は両氏は疑いなく誠実な人なので、両氏の陳述は真実なものとして十分に信用できる

ものである」

右の物語の最後の一節に特に注意を払う必要がある。すなわち船体の光とその光源との関係である。これまでも互いに無関係なさまざまな目撃者が「飛行船が加速するときはいつも光が暗くなる」と述べている。サンプターとマクルモアがウソをついているとすれば、両名は他の目撃事件類や入手がたいと思われるような新聞記事にさえも精通していたということになる。(偶然の一致か否か、四月中旬にイリノイ州の作男(複数)が、二人の男と一人の女とが操縦する飛行船に出会ったと称している)

7

こうした飛行船の存在を認める人々のあいだには、この乗物が地球人、それもおそらくアメリカ人の発明家によって操縦されているということにほとんど疑いはなかった。キャンザス州コロニーの「フリー・プレス」紙の或る主筆を除いて(この人は飛行船が火星から来るといふ説をたてた)、飛行船がそれ以外の何かであるかもしれないという考えが人々の心に浮かんたとは思えない。

一八九七年の諸事件はわれわれが現在知っているようなUFO活動の典型的なものでないことは当然明らかである。実際私は飛行船をUFOの部類に入れることを差し控えてきた。というのはそれが文字通りの意味をなす物(未確認飛行体)である一方、われわれが今日UFOと呼んでいる物とは全然異なるからである。一八八〇年、一八九六年、一八九七年に米国で見られた現象は(一九〇九年にはウェイルズとニュージールランドで、一九一四年に

はアフリカで見られた)、飛行船であって、この大氣中を限られた飛行をするために作られた一種の空気より重い建造物である。それは現代の「空飛ぶ円盤」の如き宇宙船でないことはまず疑いない。

その時代のあらゆるコンタクト物語において、飛行船が地球の建造物であるという考えは、当時の科学技術や気質を都合よく支持するのに都合よく行なわれていた。当時科学において比較的急速な進歩をとげつつあったのであるから、或る種の航空機が近い将来に発明されるだろうと広く信じられていた。これは現在、惑星間宇宙船が数年後に完成するものと期待されているのと同様である。想像による飛行船のあらゆる機能が十九世紀のアメリカ人によって予言されていた。ここには彼らの理解力を超えた概念はなかったのである。「反重力によって推進するUFO」だの「高度に進歩したデザインの飛行体」とか「小人」とか「金髪の金星人」といった考えは存在しなかったのだ。要するに今日UFOの存在を認めているわれわれにとって事新しく期待すべきものはないのである。

一八九七年のコンタクト事件(複数)は避け得られないものであった。ただし制限されたコンタクトは起こることもあるし、また起こっているという前提を人が認めるならばである。飛行船の特殊な性質のためにコンタクトはそういうふうに行なわれねばならなかったのだから。したがって地球の建造物であるという人々の信念を強めたのである。もし乗員たちがその出現にたいする地球人の反応に無関心であったならば、当時の新聞に掲載されたようなきわめてコックイな物としてよりも、もっと進歩したデザイ

ンの機械を飛ばしたことだろう。

一八九七年の飛行船目撃報告類を研究して、一人の著名なUFO研究者は、飛行船は米国の一科学者によって発明されたのだと結論づけている。いずれ著書でそのように述べるだろう。彼をこの結論に導くような特殊な情報を持っているのかどうかは知らないが、むしろその考えは、存在する資料の皮相的なやや不完全な調査に基づいているのではないかと思う。たしかに、一、二度その時期を研究したことのある人のほとんどすべての人は、これは全く地球人の仕事ではないかと考えている。人を迷わせるに足るほどのデマが新聞に載ったからだ。しかし結局はトーマス・エディスンが言ったように「だれかがうまく飛行船を作って、その事を秘密にしておくことができる」とは絶対に考えられない」と結論づけねばならない。

しかも右のUFO研究者の言葉を信ずるには、一八八〇年にニューメキシコ州に、一八九六年にケアリフォルニア州に、一八九七年には全米に、一九〇九年にはウェイルズとニュージールランドに、一九一四年には南アフリカに、匿名の発明家と飛行船を操縦する役目の数十名の人間が出現したと信ずる必要がある。またこの事すべては實際上完全な秘密裏に遂行されたと思われなければならないし、しかもそのとき以来、最初の空気より重い飛行機械の創造においてライト兄弟が果たした役割を無に帰せしめるような物は何も現われていないと考える必要がある。

私が意見として述べたいのは、本稿中で推測したように、真相は、この飛行船はその素性において現世のものではないらしいということである（必ずしも惑星間宇宙船とは言えないが）。この

ように臆測すると、UFOをあやつる人間は(1)われわれを惑わそうとしているのか、または(2)観測者の環境を考えて出現すると仮定するならば、この神秘は解明されると言いたい。この二点は重複するかもしれないが、これはUFO乗員の目的に関する正反対の推測に基づいたものである。

まず右の(1)においては、どこか他の場所から来た人間によって行なわれた長期の航空作戦行動と考えられる。必ずしも敵意ある者ではないが、この人間たちは自分の正体や目的が何であるかをこちらに知らせようとしないうし、それゆえに巧妙さ、より明確な行動、コンタクトにおいて伝えられたメッセージ等によって、彼らに関する誤った概念をこちらに植えつけようとしてきたのである。彼らがこの地球上でやっていることは右の仮説を立てる上に特に関係があるわけではない。ただし私はいずれ別な記事でこの問題を論じようと思っている。

地球人に感違いさせるために、UFOに乗っている連中は、自分たちがこの地球人に最も容易に信じて理解してもらえらる人間であるかの如く振舞っているのである。古代においては迷信にとらわれた人々はUFOを神または魔法使いと呼んだ。W・R・ドレイクが述べた或る奇妙な物語（『ノルマン時代の宇宙人』と題する記事）で、人間たちが自分らは「マゴニア」または「マクス（魔法の国）」から来たと言ったと述べている。またポール・ミスキー（ポール・トーマス）はそのすぐれた著書『各時代に現われた円盤』の中で、聖書に出てくる天使なるものは実際にはUFOに乗った人間であったと論じている。今日この宇宙時代においてわれわれは空飛ぶ円盤が宇宙船であると信じさせられている。と

すると、一八九七年四月に——これはライト兄弟が初めて飛行機に乗った年よりも六年半前だが——ナゾの飛行船が地上のものであったという説よりもっと話のわかる説があるとすれば、それは何だるう？

前記二点のうち(2)の場合は多分に同じ推理に基づいているが、UFO訪問の動機については私はさほど疑わしい見解をとっていない。思うに、おそらくUFO乗員はUFOの性質そのものによる理由で、地球人とおおっぴらなコンタクトができないのだから、着陸して彼らの存在をはっきりとわからせることが不可能なために、目撃者が理解できるようなかたちで自分たちを見せることによって自分たちを知らせようとしているのだ。つまり一八九七年には飛行船で、一九四七年には宇宙船で、というふうだ。もし彼らがその真の姿で現われるならば、それがあまりに奇妙なためにわれわれは彼らを全然認識できないかもしれない。たぶん時代の流れとともに人間の知識と意識が拡大するにつれて、UFOの神秘も発展し続け、ついにわれわれはその真の意味を理解するようになるだろう。

明らかにここでわれわれは一つの重大な道理に関する思索におちいつている。だが右の後者の推測は大体に私の独創ではなくて、米国の数種類のUFO誌にピーター・コールという筆名で記事を發表した或るUFO研究者による説であることをはっきりさせねばならない。UFO問題に関連して一連のきわめて高度に複雑な仮説を打ち出したコールは、UFOの神秘の意義を研究家連は完全に解釈し誤っていると論じている。彼は必ずしも完全な自信を有していないが、重要な新しい領域を開こうとしているので、これを無視してはならない。

とにかく真相が究極には何であろうとも、一八九七年の騒ぎは一般の状況から「空飛ぶ物体」を引き離そうとする試みの無意味さを示している。コールが書いてるように、個々の報告はこのナ

ゾにたいするわれわれの理解を妨げるにすぎないというのももともとなことだ。たぶん個々の円盤は何も意味しないだろう。一般の円盤こそ何よりも重大なことを意味するのである。

そこで例の飛行船はナゾを解くための最大のカギの一つであるかもしれない。ケネス・アーノルド以後の時期にわたる研究家にも、またUFO人が彼らの側の条件で地球人と会えないにしても、とにかくUFOはわれわれのほとんどんどが喜んで認めようとするよりもはるかに深遠な神秘を生み出しているのである。

注|| 飛行船のアイデアはかなり昔からあったけれども、近代においてこれを実用化させたのはドイツ人技師ツェペリンである。彼は一八九四年、五十六才のとき、アルミニウム骨組にアサ布、絹布を張った硬式飛行船の設計、試作に着手し、第一号LZ-1が完成したのは一九〇〇年であった。資金難で第二号は〇五年に、第三号は〇六年に建造され、これをもって飛行船の実用性がやっと認められるようになった。したがって第一号は使いものにはならず、それ以前すなわち一八〇〇年代に各国を周遊できるほどに進歩した飛行船がどこかで建造されたという記録はない。ツェペリン飛行船は全部で百十九隻作られたが、それらはすべてガスによって浮揚する方式のもので、「車輪」をそなえたのではない。ツ伯の死後、ツェペリン飛行船会社はLZ-127を二七年に建造し、これが二九年八月に世界一周を二十日間でなして新記録を作った。しかし最新鋭のLZ-129(ヒンデンブルク号)が一九三七年五月六日、レークハースト飛行場に着陸の瞬間大爆発を起こした事件は編者の記憶に残っているが、これをもって飛行船実用時代は終りを告げたのである。

特別総会開催さる

去る八月二十一日（日）に日本GAPは東京都世田谷区成城町の中田晴久氏宅において、今年度特別総会を開催した。参加者は三十二名、かなり遠方から来られた方もあり、楽しい集会であった。

午前十時三十分からまず例会を開き、安斎純夫氏の司会により、「生命の科学」の輪読と研究を開始する。この日は第七課の「宇宙的記憶」を主に研修したが、活発な討論が行なわれて真剣な空気がみなぎった。

昼食少憩後、午後一時十分から総会に入る。高橋史氏の挨拶に始まり、全員自己紹介のあと、GAP久保田代表の講演に移った。アダムスキー派の闘士として十数年を奮闘してきた代表の苦心談や円盤研究界の裏話、その他興味ある事実談などが約一時間半ほど続いて多大の感銘を与えた後、質疑応答に入る。回答は代表。活発に質問が提出され、なかには高度な難問もあったりして、講演なれしている代表もたじたじになる場面もあったが、総じて参会者全員が決して単なる好奇心やひやかして集まったのではなく、高い目標をもって前進しようという態度を示されていたのは喜ばしい。このあと会員が庭園に出て中田氏のカメラにより記念撮影をし、再び会場で経過報告、会計報告等が行なわれ、最後に高橋氏の挨拶によって盛況裏に幕を閉じたのは六時三十分であった。ご協力下さった方々に厚く御礼を申し上げます。（写真中央が久保田代表）

（ニラ沢記）



新刊!

宇宙哲学

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎 訳

「テレパシー」生命の科学に続くアダムスキーの大偉業。スペース・ブラザーズから伝えられた深遠広大な哲学の精髓を記した現代最高の真理の書。これをもって哲学のシリーズが完結する。アダムスキー派研究家の必読の書であり、一般人にも座右のバイブルとして不可欠であるが、少数限定版のため書店にはないので早目に下記へ申し込まれたい。注文先を間違えないように。なるべく定額小為替を利用のこと。切手代用は不可。今後再版の見込なし。

新書版 100頁 1部 ¥300 円 50

申込先 埼玉県鴻巣市原馬室4 648
高橋 史(ちかし)

生命の科学

G・アダムスキー
久保田八郎 訳

アダムスキーの哲学を生活で実践する方法を具体的に解説した絶筆。特に宇宙的想念を常時反覆思念することにより、難病を治癒せしめ日常生活に種々の奇跡を生ぜしめる方法を詳述。その実例が各方面で発生す。

B5 76頁 ¥300 円 55

申込先 久保田八郎

宇宙同好信通

一月刊 一
円共 ¥125

日本GAP副機関誌。ニューズレターに掲載されない興味ある有益な記事を満載す。
申込先 東京都豊島区雑司ヶ谷一丁目二十九番七号太田方 安斎 純夫

ニューズレター バックナンバー(旧号)

1部定価送料共 ¥100

申込先 東京都大田区調布千鳥町78 紀陽荘内 楠元幸二

- ☆第一号、第二号 合本
久保田八郎論説「真実」「私の見解」「バンズン氏との会見記」その他。
- ☆第三号
「世界の変動」「まじめな探究者のために」「各国協力者からの情報」その他。
- ☆第四号
「個人的体験を通じて求道へ」「ジョドレルバンクの神秘」その他。
- ☆第五号
「サイレンスグループと金」「最初の因」「地震に関する報告」「私はなぜメキシコへ行くか」「地震と空震」その他。
- ☆第六号、七号 合本
「パピロンの時代」「宇宙哲学」その他。
- ☆一九六二年五・六月号
「真実の真理と表面だけの真理」「この運動における協力の仕方」「私のセンスマインド抑制法」「われら何をなすべきか」「宇宙哲学」その他。
- ☆一九六二年七・八月号
「真実は認められつつある」「ブラザーズと哲学」「地球、八時間震動す」「イタリヤの円盤同乗事件」その他。

— 編 集 後 記 —

◎たびたび本誌の発行が遅れて申し訳ありません。弁解がましいようですが、本誌発行については翻訳、編集、タイプ打ち製版、印刷製本（今回印刷のみ業者に依頼）その他事務等一切が久保田個人のワンマン・オペレイション（ただ一人でやる仕事）であり、それを日中の勤務（編者は高校教員）以外の時間を利用してやりますのではかどらず、加うるにGAP以外の仕事も山積していて多忙の上ありませんが、本誌発行を停止するつもりは毛頭ありませんのでご安心下さい。不定期刊ながら必ず継続いたします。

◎しかし今回もひどく遅延したことにたいするお詫びの意味で本号は頁数を増加して36頁とし、別刷の「宇宙への誘い」を付録として添付しました。この付録は部内在住の幹部諸氏によって作られたものです。ご努力に感謝しております。

◎あまり発行が遅れるので「久保田はアダムスキーにたいする自信を失ったのではないか」とおっしゃる方もありますが、そのようなことはありません。別刷付録でおわかりのようにア氏の体験は次々と科学界で実証されており、私としてはむしろ自信を高めています。最近も月ロケット「ルナ・オービター」が月の「静の海」に六本の神秘的な塔がそびえている写真を撮影し、それが十一月二十四日付の朝日新聞に出ています。新聞記事をあたまたまら盲信するわけにはゆきませんが、どのみちこれからは次第に真相が洩らされる方向にすすむでしょう。そこで従来の個人的なGAP活動だけでは思うような奉仕もできませんので、これを発展させて東京都内に本格的な出版社を設立し、円盤と宇宙哲学関係の専門誌や図書を発行する構想も持っています。しかしこれには最低資金五百万を要しますのでおいそれとはゆきませんが、幹部諸兄と種々画策中でありますので、ご協力のほどをお願いいたします。

◎米国GAP本部（アダムスキー財団）の幹部として活躍中のロウランド・ケセラ氏から十月八日付の私信が来ましたが、それによるとアダムスキー撮影の円盤実写映画フィルム、スライドその他の資料はいずれ必ず送るように手配するからということですが、手紙の一部を次に掲げます。

「あなたのたいそう思慮深い言葉と写真に心から感謝しています。実際私たち二人のあいだには真の温かい関係が存在していると思おいてすばらしい機会を持っています。この活動において可能な限りの協力を惜しみません。

日本は美しい国のようにですね。終戦直後の数ヶ月間、私はワカヤマからクレ、コーベへ向かって内海を航行しましたが、実に美しい光景でした。しかし爆撃で壊滅した諸都市よりもっと私を驚かせたのは日本人の勇氣と蘇生力です。これを決して忘れることはできません」

◎新入会員の方々に更めて紹介しますと、アリス・R・ウエルズというのは、アダムスキーが一九五二年十一月二十日に初めて金星人に会ったときの六人の目撃者の一人で、約三十年間ア氏の助手として仕え、ア氏亡き後は財団理事長として世界GAPを統率している人です。アドリエンス・ムンケバーグとジム・エンツミンガーはアリスの助手として活動している幹部です。

◎「アダムスキーが帰って来たか？」という奇妙な物語は英国で発生した事件ですが、これについて米国GAPは全然反応を示しておらず、むしろ、事件そのものは事実であったにしても乗員たちは真の金星人ではないことをアリスはほのめかしています。本号には一応参考記事として掲載しました。一方ハニー氏からの最近の情報によれば、種々のコンタクトが発生しているけれども、なかにはこの太陽系以外の別な太陽系から来る宇宙船もあって、

それらは必ずしも友好的ではないから要注意！とあります。ハニエ氏の友人がコンタクトして円盤内へ入れられたことがあり、これは友好的であつたけれども、そのあと腰部にガンが発生したということですが。また地球人が偽装したニセ宇宙人もいるので、コンタクトには慎重を要すると警告しています。こうした場合の判断力の土台となるのは宇宙哲学なのであって、この基礎がないと宇宙にたいする本格的な開眼は困難でしょう。

◎健康についてと題する記事の筆者巽直道氏は新精神学会の主宰者で、長いあいだ精神作用により多数の難病者を奇跡的に治す活動を続けておられ、その実績は驚異的です。ア氏の哲学と一脈通じる理論をとなえておられます。宗教団体ではありません。詳細は直接左記へご照会下さい。

神戸市兵庫区矢部町五三、新精神学会、電話(四)三二四三
 ◎一八九七年の不思議な飛行船は英国の円盤研究誌「フライイング・ソーサー・レヴェュー」本年七・八月号に掲載されたもので、過去のUFO事件を知る上で貴重な資料です。この「レヴェュー」誌は世界最高権威を誇る円盤研究誌で、かつてアダムスキーにたいしてきわめて友好的でした。直接購読をご希望の方は編者宛ご照会下さい。

◎宇宙哲学をついに刊行しました。これはかつて本誌に連載した訳文に未訳の部分を加えて徹底的な改訂を施した上、一本にまとめたもので、携帯に便利のように新書版にしました。この書を主体にし「生命の科学」を副にするのア氏の哲学研究は完璧になります。これを応用して精神感応力を開発する具体的な方法を述べたのが「テレパシー(文久書林刊)」です。ぜひお求め下さい。会員外の方にもおすすり下さるようお願いいたします。

◎本会発行の各種刊行物の申込先がまちまちでまぎらわしくて恐縮ですが、目下は仕事を分担してやっておりますので、これもやむをえません。ご了承下さい。

◎日本GAPは毎月一回東京都内で研究会を開催しております。この会合を「宇宙研究同好会(略称UD)」と称してはいますが、これは日本GAPとは別個な団体ではなく、同一グループです。ご留意のほどを。UDからは副機関誌「宇宙同好通信」が出ています。本誌とあわせてお読み下さい。(本誌35頁を参照)会合に出席を希望される方は本誌第三十二号をごらんになるかまたは左記へご照会下さい。

東京都世田谷区成城町五六一、中田晴久、電話(四一六)一三五〇
 ◎本号34頁に掲載の写真ご入用の方は編者宛お申込下さい。キャビネ版一枚実費四十円、送料二十五円、計六十五円(切手で可)。

◎去る十一月下旬に開かれた恒例の早稲田祭において同大学学生森脇十九男氏主宰の「宇宙円盤研究会」は、偉大なるアダムスキーという趣旨で資料展示を行ない、大成功をおさめたということでした。期間中は本会からも応援に出て「宇宙への誘い」のパンフレットを配布しましたが、予想以上の反響があり、一般学生の関心の深さを知ることができました。喜ばしいことです。◎例によって年賀状は一切出しませんでした。喜ばしいことです。(久)

日本GAP ニューズレター 1966 第三三三号

翻訳編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP (別称UD)

島根県益田市益田古川 振替・松江 二六三〇 (久保田八郎個人名義)

昭和41年 12月10日発行 不定期刊

第33号

頒価 一三〇円・送料三五円